岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第431集

楊生新城館跡発掘調査報告書

一般国道284号道路改築事業関連遺跡発掘調査

岩手県一関地方振興局土木部
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

楊生新城館跡発掘調査報告書

一般国道284号道路改築事業関連遺跡発掘調査

序

豊かな自然に恵まれた岩手県には、旧石器時代を始めとする数多くの遺跡や重要な文化財が残されております。これらの多くの先人たちが創造していた文化財を保存し、後世に伝えていくことは、私たち県民に課せられた責務であります。

一方、本調査の原因となりました道路改良工事を例にあげるまでもなく、現代社会を豊かにし、快適な生活をおくるための環境整備もまた県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と地域開発という、相容れない要素を持つ事業の調和のとれた施策が今日的課題となっております。

財団法人岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置を取ってまいりました。

本報告書は、「一般国道284号道路改築事業」に関連して、平成10年度に岩手県教育委員会生涯学習文化課が実施した試掘調査の結果を受けて、当センターが平成14・15年度に実施した楊生新城館跡の調査結果をまとめたものであります。

今回の調査では、試掘結果から予想されたとおり、城館跡に関連する曲輪、テラス状遺構、堀跡、土塁が検出されており、本遺跡が中世の城館跡であることが明らかになりました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解あるいは啓蒙普及の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び本報告書作成にご援助・ご協力を賜りました岩手県一関地方振興局土木部・一関市教育委員会をはじめ、関係各位に衷心より謝意を表します。

平成16年 2 月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　　合　田　　武

例　言

1．本報告書は、岩手県一関市弥栄字沼畑地内に所在する楊生新城館跡の平成14・15年度における発掘調査結果を収録したものである。

2．本遺跡の岩手県遺跡登録台帳の遺跡番号と調査略号は次の通りである。
遺跡番号：OE09－2056、調査略号：YOSJ－02・03

3．本調査は、一般国道284号道路改築事業に伴う緊急発掘調査である。岩手県教育委員会生涯学習文化課の調整を経て、岩手県一関地方振興局土木部からの委託を受け、（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

4．野外調査の期間・調査面積及び調査担当者は次の通りである。
平成14年10月18日～11月19日　／　1,500㎡　／　亀大二郎、羽柴直人
平成15年４月８日～５月15日　／　1,000㎡　／　吉田　充、野中真盛

5．本報告書の執筆と編集は吉田　充と亀大二郎が行った。

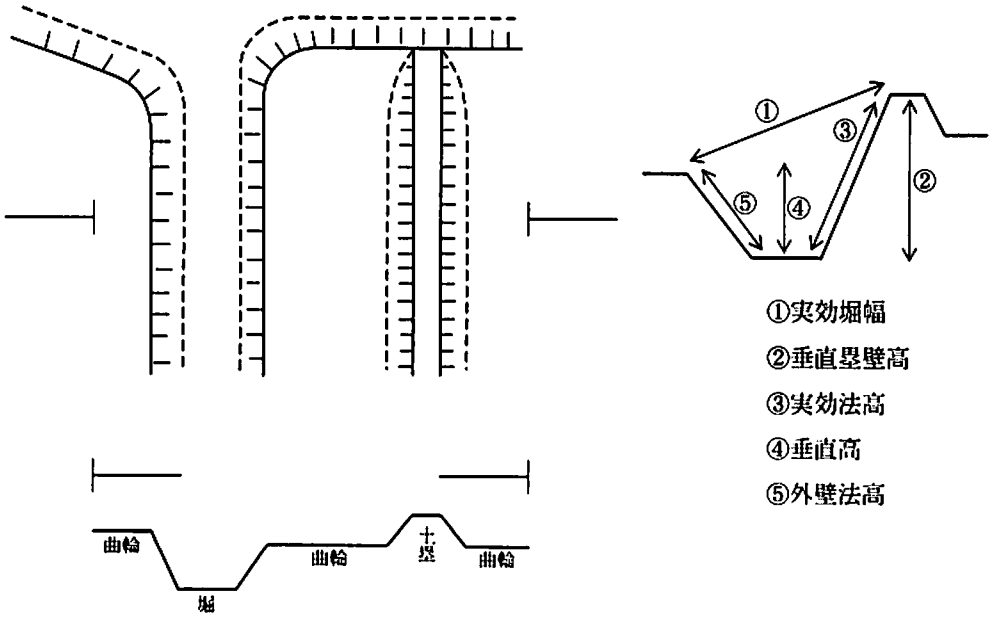
6．室内整理作業は、平成14年11月１日～平成15年３月31日まで、及び平成15年11月１日～12月31日まで実施した。

7．基準点の測量と航空写真撮影は、次の機関に委託した。
基準点の測量　…　(株)総合土木コンサルタンツ
航空写真撮影　…　東邦航空(株)

8．発掘調査・整理作業に於いて、次の機関の協力を得た。（敬称略）
一関市教育委員会、室野秀文（盛岡市教育委員会）、千葉和弘（花巻市）

9．本遺跡の調査に係わる記録と遺物等の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターが保管している。

10．遺構の図示法や計測値の名称は次の凡例の通りである。



目　次

序
例言

【本　文】

Ⅰ　調査に至る経過 …… 2
Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 2
1．遺跡位置と地形・地質 …… 2
2．基本層序 …… 4
3．周辺の遺跡と歴史的環境 …… 4
（1）周辺の遺跡 …… 4
（2）歴史的環境 …… 5
Ⅲ　調査と整理の方法 …… 8
1．野外調査 …… 8
（1）グリッドの設定 …… 8
（2）粗掘りと遺構検出 …… 8
（3）遺構の命名について …… 8
（4）遺構の精査と実測 …… 8
（5）写真撮影 …… 8
2．室内整理 …… 9
Ⅳ　検出された遺構 …… 13
1．曲輪 …… 13
2．テラス状遺構 …… 17
3．堀跡・土塁 …… 19
4．切岸状遺構 …… 20
Ⅴ　まとめ …… 21
1．遺構について …… 21
2．縄張りについて …… 21
3．周辺の城館と楊生新城の役割について… 21
4．城主について …… 22
5．石塔（婆）について …… 24
参考文献 …… 25

【図　版】

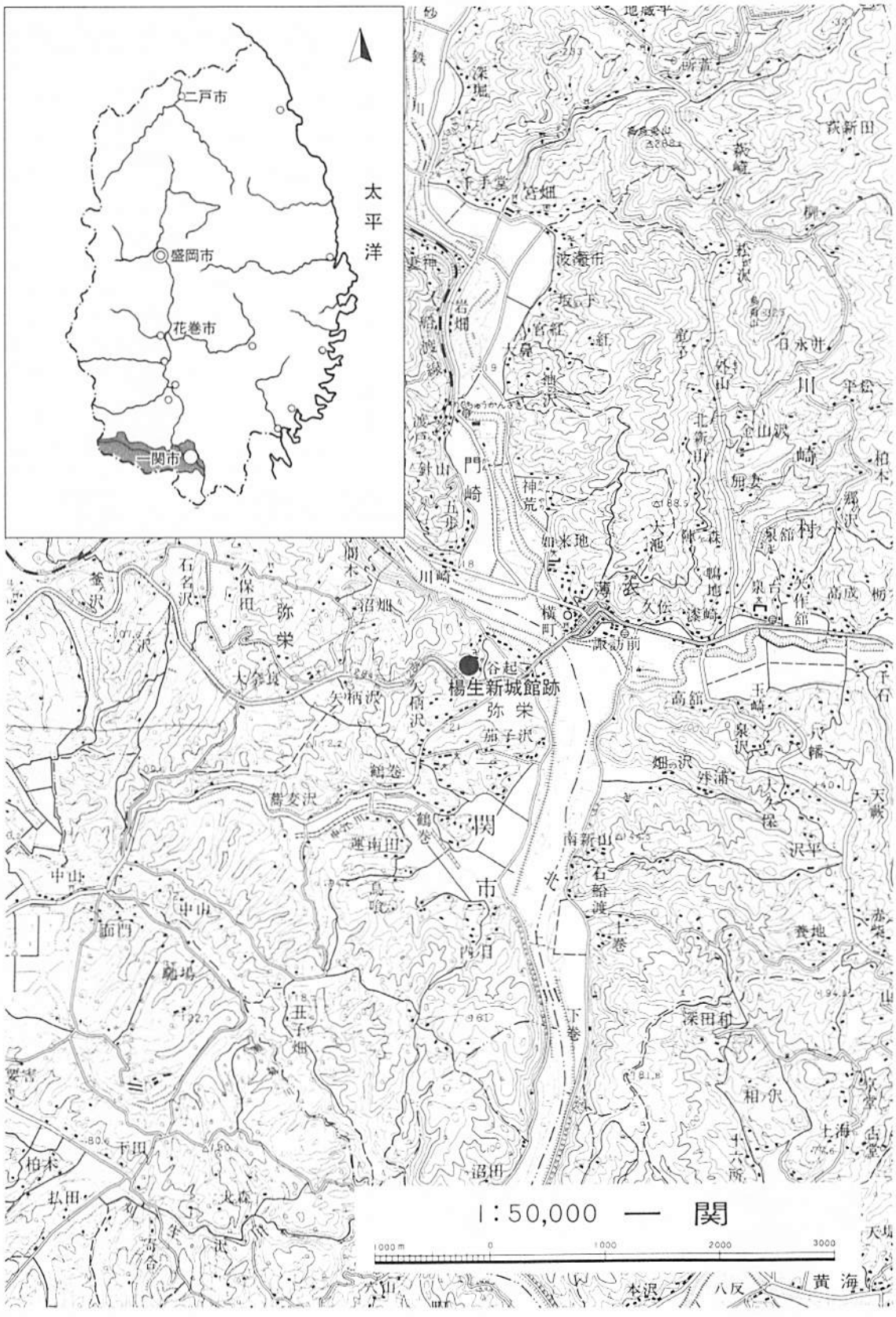
第1図　遺跡位置図 …… 1
第2図　調査区と周辺地形 …… 2
第3図　地形・地質図 …… 3
第4図　基本層序 …… 4
第5図　周辺の遺跡 …… 6
第6図　グリッド設定図 …… 9
第7図　遺構配置図 …… 10
第8図　現況地形図 …… 11
第9図　1・2号曲輪 …… 13
第10図　3～8号曲輪 …… 15
第11図　4・7号曲輪断面 …… 16
第12図　テラス状遺構 …… 18
第13図　堀跡・土塁 …… 19
第14図　切岸状遺構 …… 20
第15図　縄張り図 …… 26
第16図　流郷城館分布図 …… 27

【表】

第1表　周辺の遺跡一覧表 …… 5
第2表　基準杭・補助杭座標値 …… 8
第3表　流郷の城館跡一覧表 …… 28

【写真図版】

写真図版1　空中写真(1) …… 31
写真図版2　空中写真(2)・遺跡近景 …… 32
写真図版3　調査前風景及び基本土層 …… 33
写真図版4　試掘箇所及び作業風景 …… 34
写真図版5　1～8号曲輪、1・2号テラス状遺構 …… 35
写真図版6　3・4号テラス状遺構、堀、土塁 …… 36
写真図版7　旧御神坂、現参道、主郭跡、石塔 …… 37



第1図　遺跡位置図

Ⅰ　調査に至る経過

一般国道284号は、岩手県陸前高田市気仙町字的場地内の一般国道45号を起点として、宮城県気仙沼市及び岩手県東磐井郡室根村、川崎村、千厩町を経て、岩手県一関市萩荘字金ヶ崎地内の一般国道４号線に至る延長63.0㎞の主要幹線道路であり、南三陸沿岸部と岩手県内陸南部の文化・産業・物流の中心都市である一関市を結ぶ主要幹線道路である。

しかしながら、川崎村薄衣地区から一関市弥栄地区までの区間は幅員が狭小であることに加え歩道が未整備であり、また、北上川に架かっている北上大橋は老朽化が進行し床版の破損が著しく、重量を制限して通行を余儀なくされていることから安全かつ円滑な交通が阻害されている状態にある。

このような状態に対処するため岩手県では平成４年度より道路改築事業にて川崎村薄衣から一関市弥栄地区までの延長約3.5㎞区間を道路構造令第３種２級の規格にもとづき整備を行っており、平成15年度に事業が完了する予定となっている。

（岩手県一関地方振興局土木部）

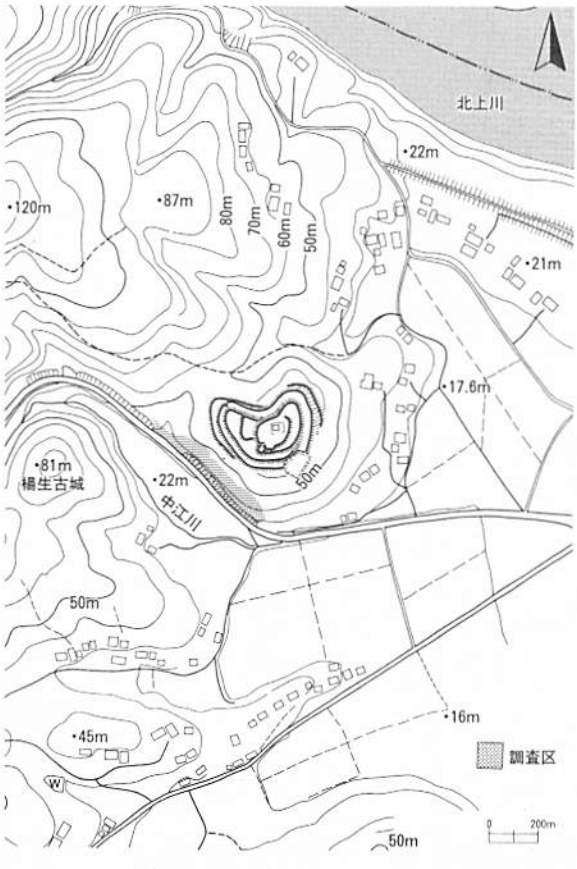
Ⅱ　遺跡の位置と環境

１．遺跡位置と地形・地質

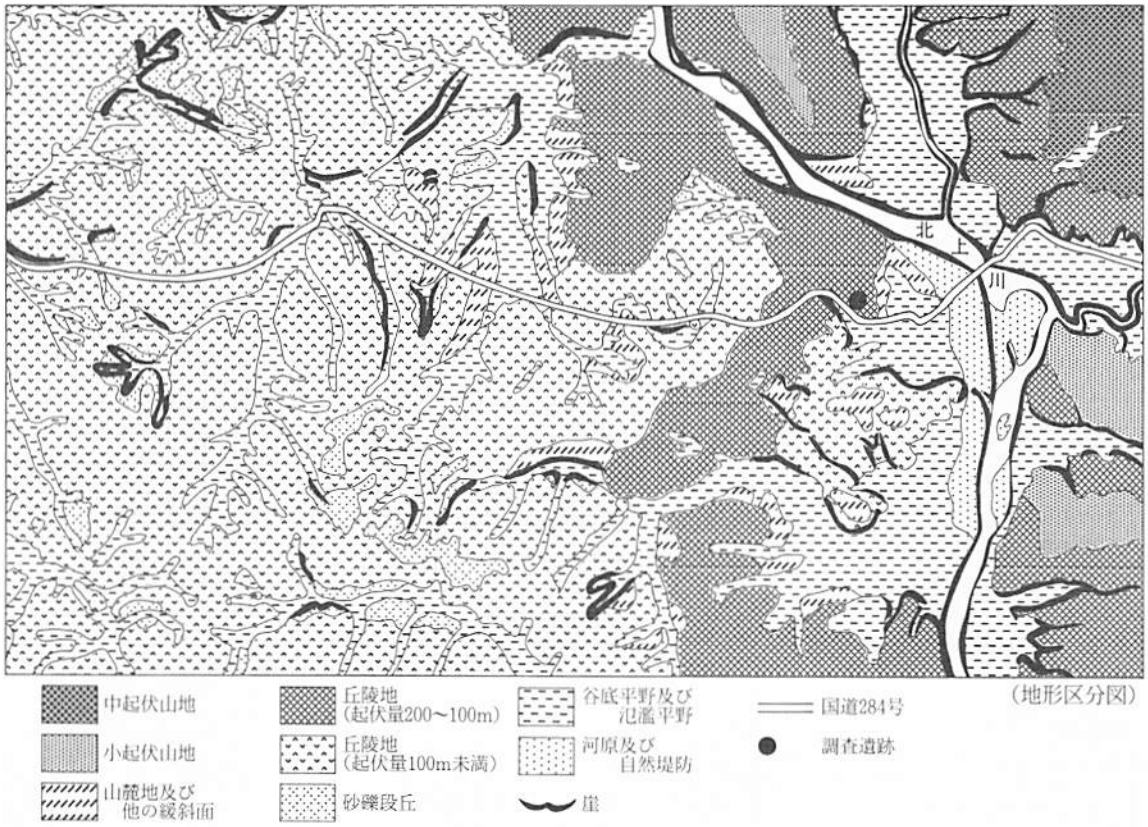
（第１～３図、写真図版１・２）

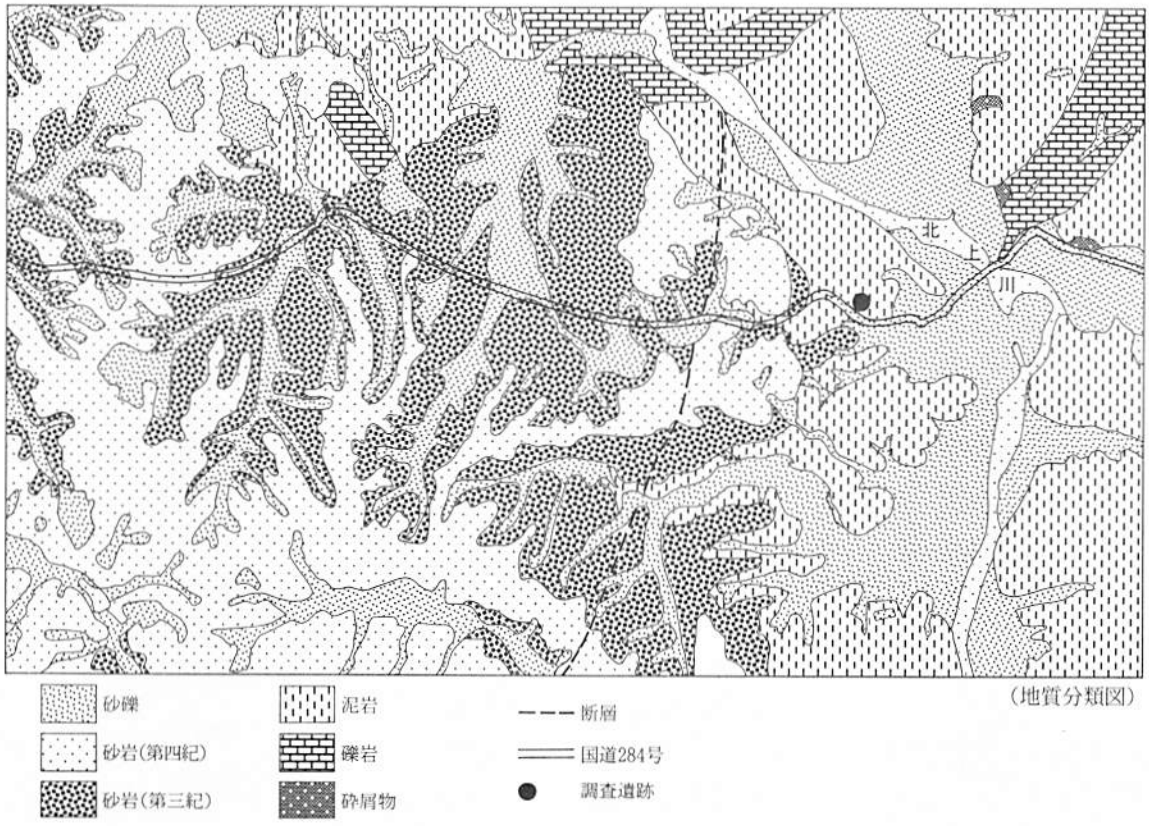
本遺跡が所在する弥栄は一関市の最東端にある。東は北上川を経て東磐井郡川崎村、南は中仙峠を経て西磐井郡花泉町と接し、西は旧真滝村と隣接する。面積は20.38㎢あり、東経は141度12分から16分、北緯は38度51分から55分に位置し、南北に細長い菱形状を呈している。

地形は北上川と接する北部及び南部の一部において急斜面もあるが、全体的に見て標高差の少ないなだらかな凹凸をしている。北上川、一の沢川、中江川の河岸及び河口付近には標高20m前後の沖積平野が発達し、特に北上川河岸の谷起及び鶴巻付近の沖積層は標高わずか24m前後で、たびたび洪水に見まわれた歴史をもっている。これらの河川付近には50m以下の地形が発達し、一の沢川、中江川ではかなり上流までおよんでいる。北の沢では100m以上の高地が北から南にかけて発達し、弥栄地区における最高峰大森山が真滝境にそびえる。また南には中仙峠から東に花泉境に沿うよう



第２図　調査区と周辺地形


北
上
川
中起伏山地
小起伏山地
山麓地及び
他の緩斜面
丘陵地
(起伏量200～100m)
丘陵地
(起伏量100m未満)
砂礫段丘
谷底平野及び
氾濫平野
河原及び
自然堤防
崖
国道284号
調査遺跡
(地形区分図)


北
上
川
砂礫
砂岩(第四紀)
砂岩(第三紀)
泥岩
礫岩
砕屑物
断層
国道284号
調査遺跡
(地質分類図)

第3図　地形・地質図

に帯状に100m以上の高地が続き、東端にきて大きく広がる。

弥栄の地質は北の沢、本郷、西風、蕎麦沢、日向にみられる粘板岩及び礫岩を中心とした古生代の地質と標高50m以上に見られる砂礫層を中心とし、凝灰岩及び泥岩層を狭在する新生代の地層と北上川に注ぐ北の沢川、楊堰、中江川などの河口付近に発達している沖積層よりなる。また、熊野神社（本遺跡内）から国道284号沿いに及び小間木をへて大船渡線横石鉄橋付近にかけては、古生代の地層が分布している。

本遺跡は、弥栄地区の東側にあたる北上川西岸の山地に立地している。標高は25～74mで、南側斜面下を国道284号が通っており、国道を挟んで南西側に楊生古城館跡が並んでいる。現況は山頂に熊野神社が奉られ、東・北側斜面は広く畑地となっている。

2．基本層序（第4図、写真図版3）

遺跡の地山は古生代二畳紀の粘板岩と粗粒砂岩の互層からなる。表土に覆われている粘板岩は風化して1cm～数cmの軟質の板状小破片となり、粘土化している。遺跡の土層は場所により土質・厚さが変化するが、概ね次の通りである。

Ⅰ層：黒褐色土（腐葉土）

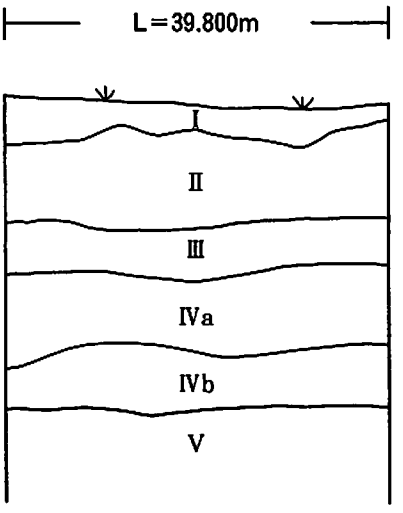
Ⅱ層：7.5YR4/4褐色　細礫混粘土
（礫径5～10mm　亜角礫　5％）　ややしまる

Ⅲ層：5YR4/6赤褐色　礫混粘土
（礫径5～20mm　亜角礫　15%）　ややしまる

Ⅳa層：10YR5/4にぶい黄褐色　礫質粘土
（礫径30～50mm　風化礫　40%）　堅くしまる

Ⅳb層：7.5YR5/4にぶい褐色　礫混粘土
（礫径30～50mm　風化礫　15%）　堅くしまる

Ⅴ層：7.5YR5/4にぶい褐色　角礫
（礫径30～100mm　風化礫）　堅くしまる



第4図　基本層序

3．周辺の遺跡と歴史的環境

（1）周辺の遺跡（第5図、第1表）

第5図中における弥栄周辺の遺跡は51カ所ある。図中には一関市内の遺跡が15遺跡、川崎村内のものが27遺跡、花泉町内のものが8遺跡、藤沢町内のものが1遺跡含まれている。時代別にみると縄文時代が22遺跡、平安が3遺跡、中世が16遺跡、近世が4遺跡で、複数の時代に跨る遺跡が3遺跡、そのほか寺院跡等が3遺跡ある。

旧石器時代の遺跡は、現在までのところ弥栄周辺（第5図）ではみられない。縄文時代の遺跡としては中・後期が金山沢遺跡（25）、後期が如来遺跡（6）・布佐洞窟遺跡（46）、後・晩期が大池遺跡（16）があげられる。このうち布佐洞窟遺跡からは、スレート質石灰岩と扁平の川原石が敷きつめられた敷石様配石遺構や炉跡が検出されている。遺物は土器片の他、人骨、自然遺物が出土しており、人骨からは抜歯の風習が認められている。大池遺跡からは、後期の土器片と晩期（大洞式）の完形土器（浅鉢・鉢・壺）や石錘・石棒・

石槍・石鏃といった石器類が出土している。

弥生時代としてはどうじゃ森遺跡（36）や河崎の柵擬定地（3）があげられる。遺物は散発的に僅かであるものの高坏、甕、蓋等の土器が出土しており、この時代にも弥栄周辺で人々の生活が営まれていた痕跡が遺っている。古墳時代～平安時代の遺跡も希薄であるが、河崎の柵擬定地から平安時代の土師器坏・甕と12世紀後半の平泉柳之御所跡と同様のかわらけ片が出土しており、平泉文化の影響が当地方にまで及んでいたことが窺える。河崎の柵に関しては、前九年の役で安部貞任軍が営所としたのがこの地域であると言われている。そのほか川崎村には安部氏や源頼義・義家に関わる地名・伝承が数多くあるものの、この時期における郡域の様子は不詳である。

中世としては調査遺跡である楊生新城（1）を始め、楊生古城（2）、古館（7）、富沢城（11）、西風城（19）、小館（50）、門崎城（48）、河崎の柵（4）、薄衣城（8）、高館（17）等といった多くの城館跡がある。文治5年（1189年）に平泉の藤原氏が滅亡したのち、当地方の領主となったのは御家人葛西三郎清重である。葛西氏は17代晴信が天正18年（1590年）、豊臣秀吉の奥州仕置きにおいて滅亡するまで約400年間当地方を治めており、葛西氏家臣に係わる城館が大半と思われるが、調査例が少なく構造や縄張り、また中世資料による城館主の命脈や沿革は不明な点が多い。近世の遺跡としては、外山館（51）、泉田館（26）、矢作館（27）の3カ所で城館跡が確認されているものの、中世城館と同様に全容が不詳である。

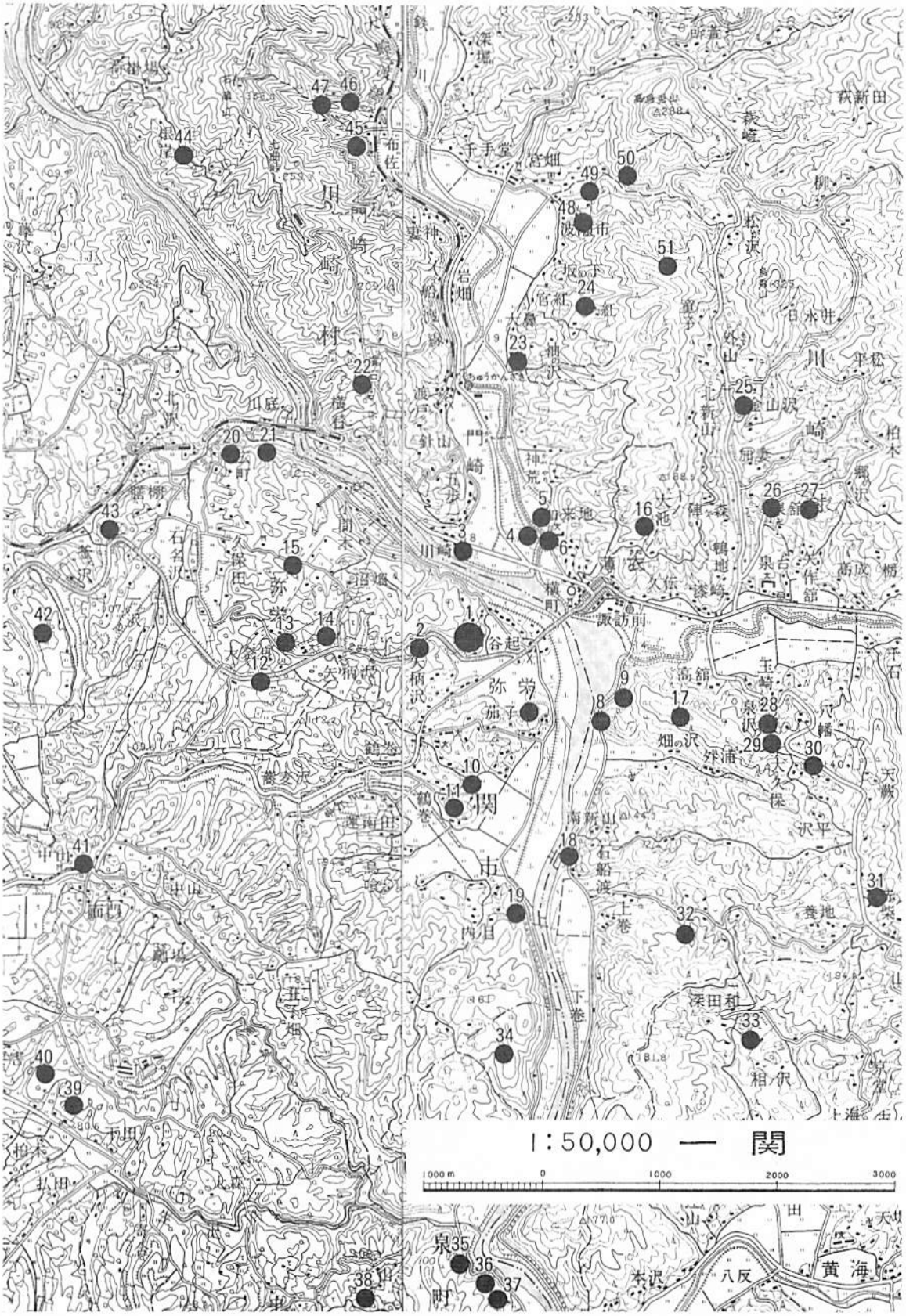
第1表　周辺の遺跡一覧表

※Noの（　）は城館跡

No	遺跡名	遺跡の種別	時代	所在地	備考
(1)	楊生新城館跡	城館跡	中世末	一関市弥栄字沼畑	囲郭・空堀／報告遺跡
(2)	楊生古城館跡	城館跡	中世末	一関市弥栄字寺町	囲郭・空堀
3	河崎の柵擬定地	城柵跡	縄文／弥生／平安／近世	川崎村門崎字川崎	
(4)	河崎柵	城館跡	中世	川崎村門崎字川崎	
5	高畑	集落跡	平安	川崎村門崎字高畑	土師器
6	如来地	散布地	縄文	川崎村薄衣字如来地	縄文土器（後期）
(7)	古館	城館跡	中世末	一関市弥栄字内の口	連郭・空堀
(8)	薄衣城	城館跡	中世	川崎村薄衣字古館	土郭・物見台
9	古館	散布地	縄文	川崎村薄衣字高館	縄文土器
10	富沢	散布地		一関市弥栄字富沢	
(11)	富沢城	城館跡	中世末	一関市弥栄字鎮巻	平場
12	大奈良I	散布地	平安	一関市弥栄字大奈良	須恵器
13	大奈良II	散布地	縄文	一関市弥栄字大奈良	縄文土器(晩期)・石棒
14	大奈良III	散布地	縄文	一関市弥栄字大奈良	石錐
15	小間木	散布地	縄文	一関市弥栄字小間木	石剣・石棒
16	大池	散布地	縄文	川崎村薄衣字大池	縄文土器（後・晩期）・石器
(17)	高館	散布地・城館跡	縄文／中世	川崎村薄衣字高館	縄文土器／土郭・堀切・帯郭
18	石船渡	散布地	縄文	川崎村薄衣字石船渡	縄文土器
(19)	西風城	城館跡	中世末	一関市弥栄字内ノ口	平場・空堀
20	細越	散布地	縄文	一関市弥栄字川底	縄文土器・石斧
21	横石	散布地	縄文	一関市弥栄字横石	石器
22	鏡子	散布地	縄文	川崎村門崎字鏡子	縄文土器（前・中期）
23	長平	散布地	縄文	川崎村門崎字百虹	縄文土器（後・晩期）・石器
24	虹	散布地	縄文	川崎村門崎字百虹	縄文土器（中・後期）・石器
25	金山沢	散布地	縄文	川崎村薄衣字金山沢	縄文土器（中・後期）・石器
(26)	泉田館	城館跡	近世	川崎村薄衣字泉館	
(27)	矢作館	城館跡	近世	川崎村薄衣字矢作館	堀
28	塚	散布地	縄文	川崎村薄衣字泉沢	縄文土器
29	十二人塚	塚	縄文	川崎村薄衣字泉沢	縄文土器
30	大久保	散布地	縄文	川崎村薄衣字大久保	縄文土器
31	赤柴	散布地	縄文	川崎村薄衣字赤柴	縄文土器
32	狭ノ平	散布地	縄文	川崎村薄衣字狭ノ平	縄文土器
33	相ノ沢	捨て場	縄文後～晩期	葛沢町前高字深田和	
34	安養寺跡	寺院跡		花泉町日形字沼田	
(35)	御上館	城館跡	城山	花泉町日形字中神	平場
36	どうじゃ森	散布地	縄文～弥生	花泉町日形字中神	縄文土器・石器・弥生土器
(37)	宇館館	城館跡	城山	花泉町日形字中神	曲輪・郭・井戸
38	角堂塚	祭祀跡		花泉町日形字中神	経塚塚・法華塚
(39)	柏木館	城館跡	中世	花泉町金沢字柏木	曲輪・土塁・空堀・腰郭
(40)	要害館	城館跡	中世	花泉町金沢字東要害	曲輪・土塁・空堀
41	歌塚	塚	近世	花泉町金沢字上新田	
42	岩崎	散布地	平安	一関市弥栄字岩崎	土師器・須恵器
43	上的場	散布地	縄文	一関市弥栄広町	石斧
44	荷掛場	散布地	縄文	一関市磐川字高田場	縄文土器（大木6式・前期）
(45)	布佐館	城館跡	中世	川崎村門崎字布佐	腰郭・空堀
46	布佐制館	制館	縄文	川崎村門崎字石越	縄文土器（後期）
47	鎮長の碑	石碑	中世	川崎村門崎字石堂	石塔婆
(48)	門崎城	城館跡	中世	川崎村門崎字渡瀬市	郭・空堀・腰郭
(49)	舌館	城館跡	中世	川崎村門崎字館畑	郭・土塁・空堀
(50)	小館	城館跡	中世	川崎村門崎字館畑	
(51)	外山館	城館跡	近世	川崎村薄衣字外山	

（2）歴史的環境

弥栄は現在一関市内であるが、中世においては葛西氏領治の流郷に含まれ、南に接する同じ流郷の花泉町



第5図　周辺の遺跡

と関わりが深かった。「花泉町史」には中世の流郷について次のように載っている。

源頼朝の奥州征伐が終わりその論功行賞が行われたが、その功臣は三十余名にも及び、奥州全域に亘って知行された。それ以降流郷は御家人統領の太守、葛西一族の治領として、中世期約四百年の歴史を共にして歩くことになる。

流郷に関係する武人に

・葛西清重－伊沢・磐井・牝鹿・気仙・本吉・その他数郡　　・金　為俊－気仙郡（関東家人でない）

・千葉頼胤－胆沢・磐井郡・伊具郡・亘理郡　　・熊谷直家－本吉郡・桃生郡

・和田義盛－栗原郡三迫・遠田郡　がある

葛西の治領について伝えるものに初期と末期では広狭があり、異説が多いが、文治年間後に江差・戦国期後期に桃生・中世末期に栗原の一部が入っている。「岩手県史」は、初め約三百郷あったのが末期には四百十八郷を領有したと数えている。

流郷はかつての高倉郷で、即ち十五郷として、長井（後の永井）・涌津・上油田・下油田・蝦島・奈良坂・志津・金森・中村・金沢・峠・男沢・日形・富沢・楊生（富沢と楊生村が現在の弥栄）となった。流を中心とする高倉郡の地域は南北朝以降、幾度かの争乱の巷となり、その領域、統治も常に動いた地域である。したがって郡郷の称号も変転し、容易に解き難いものがある。（花泉町史より）

「花泉町史」にもあるように、中世の流郷は葛西氏と対立する大崎氏との境界に位置し、交通の要衝を占める北上川と接することもあって多くの争乱の場となっている。楊生新城（調査遺跡）の時期と想定する戦国期の主だったものについて簡単に触れておく。

葛西氏は、大崎氏には伺候する時代もあったが、領境（流郷西側）を境にしてにらみ合っており、流郷の上油田、下油田、蝦島、奈良坂、清水は大崎氏の侵蝕地であった。絶えず小競り合いはあったが、大きな戦としては文明四年（1472年）、元亀二年（1571年）及び天正七年（1579年）の乱がある。このうち天正七年の乱は、葛西氏配下の富沢日向守直綱が大崎氏の支援を受けて逆心した争いで、直接の原因は流郷の旗将峠城主寺崎石見守良継であったらしい。この時藤原秀衡建立の大門地蔵堂が焼失したと伝わっている。富沢氏は最上氏や伊達氏等とも通じており、葛西氏配下の中で異端児的存在であった。

北上川を挟んでの争いとしては、永正七年（1510年）東山の巨族薄衣上総介清貞と金沢兵庫冬胤の間に起こった乱、永正十一年（1514年）と弘治元年（1555年）にあった流郷日形石畑城主小野寺氏と黄海熊館主深堀氏の争い、天正二年（1574年）の本吉大膳太夫重継を中心とした本吉の乱、あるいは九戸政実の手に落ちた北上川西岸の河崎城を葛西方の寺崎石見守吉次などが攻撃した河崎の合戦（1582年）がある。本吉重継は葛西領内の大身で葛西宗家が受けた打撃は大きく、また河崎の合戦は総大将の寺崎石見守吉次が討死し葛西方の大敗に終わっている。この二つの戦は葛西氏の後の宿命に少なからず影響したと思われる。

そのほか流郷の領治者に係わったものとして、寺崎氏以前の峠城主千葉時胤が東山松川城主松川太郎三郎胤弘などの千葉一門と金沢朝日城主金沢伊豆冬胤や熊谷掃部直時、奈良坂高森城奈良坂左右衛門太夫信置と峠村の水沢で戦った永正四年（1507年）の乱、及び天正十六年（1588年）気仙郡の巨将浜田安房守広綱と葛西氏との間で起こった浜田の乱がある。永正四年の乱は千葉一族間の争いで、この戦で峠城主千葉時胤は敗亡衰退し、峠城主（流郷の旗将）が桃生郡より転住した寺崎氏に替わって寺崎氏の時代になる。楊生郷（現弥栄）等の領治者が入れ替わったのもこの時である。浜田の乱は葛西晴信が小田原攻撃に参加が遅れた要因になり、秀吉より「領地没収」という仕置きをうけ、葛西氏及び配下にあった流郷の諸氏が滅亡の一途をたどる一因になっている。

Ⅲ　調査と整理の方法

1．野外調査

（1）グリッドの設定（第6図）

調査区域の最西北端を始点とし、50m間隔ごとに東西にⅠからⅣまで、南北にAからCまでのグリッドを設置した。さらにそれぞれを10等分し、5m間隔ごとにY軸方向に1から10まで、X軸方向にaからjまでのグリッドを組んだ。日本測地系における基準杭の位置は、基1がX＝－12,2720.000・Y＝36,650.000、基2がX＝－12,2640.000・Y＝36,570.000、基3がX＝－12,2625.000・Y＝36,545.000で、それぞれ調査区の南東側（基1）・北西側（基2及び基3）に設置した。また、調査区全体をカバーできるように基1に3本、基2に2本、基3に2本及び調査区中央に4本、合計11本の補助杭を設置した。

各基準杭、補助杭の日本測地系及び世界測地系における位置は第2表の通りである。

（2）粗掘りと遺構検出

調査にあたり、岩手県教育委員会生涯学習文化課による事前調査を参考にして再度試掘を行い、表土の厚さ、岩盤層までの深さ及び基本土層を確認した。また、調査区全域が急斜面であることから、重機は用いずに、人力ですべての掘削を行った。

（3）遺構の命名について

報告書作成にあたっては、遺構の種類ごとに曲輪：k、テラス状遺構：t、堀跡：h、土塁：dを用いた。

（4）遺構の精査と実測

遺構は、土層断面及び平面を実測と写真撮影で記録した。平面図の計測にあたっては調査区の勾配が急なため光波を用いて計測を行った。また現況地形図も光波及びレベルを併用して1/100で原図を作成している。

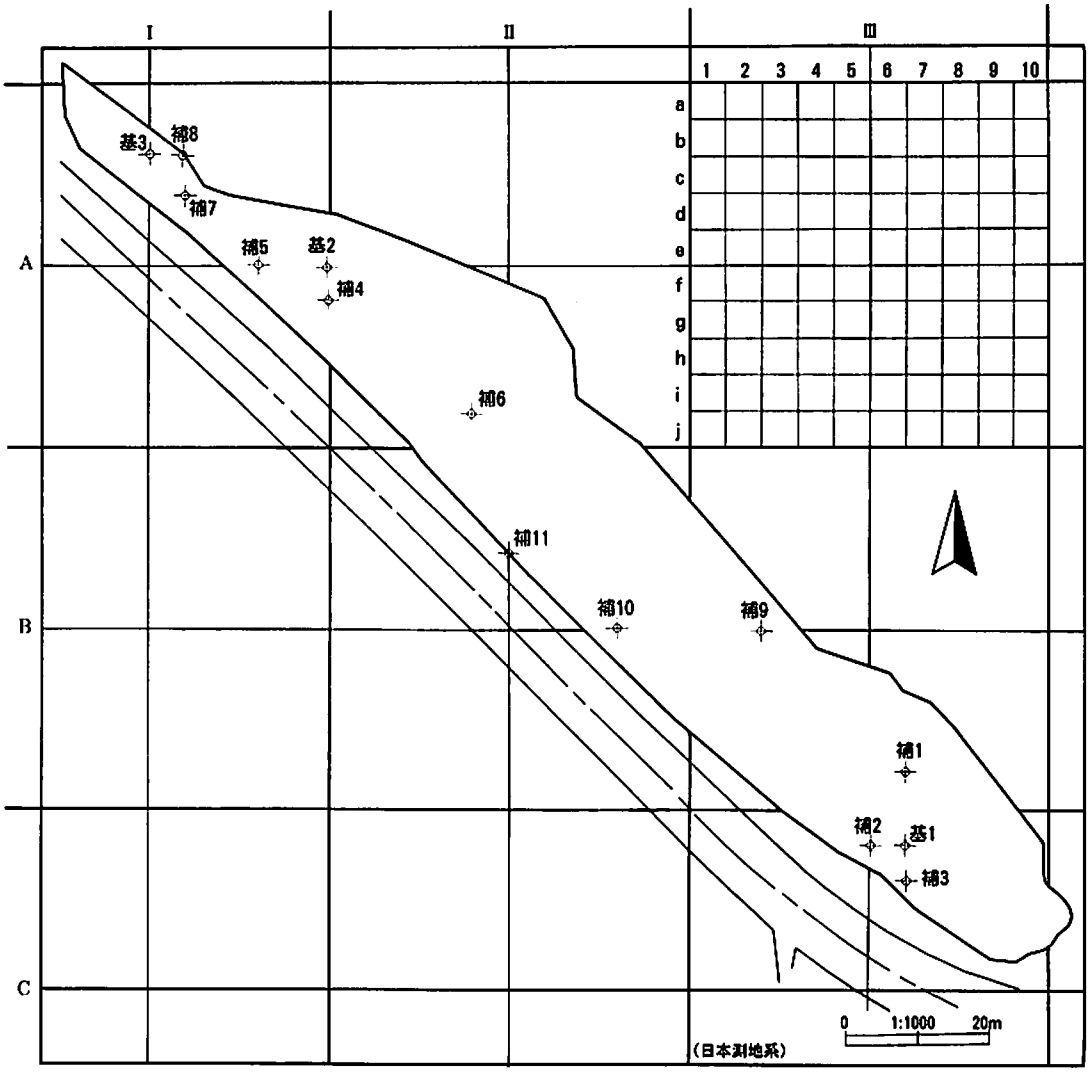
（5）写真撮影

野外調査での写真撮影は、6×7㎝判カメラ（白黒）と35㎜判カメラ（白黒・カラーリバーサルフィルム）を使用した。また、デジタルカメラをフィールドカード作成等のメモ的な用途に併用した。撮影にあたっては、対象物を撮る前に撮影内容を記載した「撮影カード」を撮影し、アルバム整理を行いやすくした。

調査終了時には遠景（南方、直上）及び近景（南西方）からの航空写真撮影を行った。

第2表　基準杭・補助杭座標値

測地系	日本測地系		世界測地系	
杭名	X座標	Y座標	X座標	Y座標
基－1	－122,720.000	36,650.000	－122,411.670	36,349.419
基－2	－122,640.000	36,570.000	－122,331.671	36,269.421
基－3	－122,625.000	36,545.000	－122,316.671	36,244.422
補－1	－122,710.000	36,650.000	－122,401.670	36,349.419
補－2	－122,720.000	36,645.000	－122,411.670	36,344.419
補－3	－122,725.000	36,650.000	－122,416.670	36,349.418
補－4	－122,645.000	36,570.000	－122,336.671	36,269.421
補－5	－122,640.000	36,560.000	－122,331.671	36,259.421
補－6	－122,660.000	36,590.000	－122,351.671	36,289.420
補－7	－122,630.000	36,550.000	－122,321.671	36,249.422
補－8	－122,625.000	36,550.000	－122,316.671	36,249.422
補－9	－122,690.000	36,630.000	－122,381.670	36,329.419
補－10	－122,690.000	36,610.000	－122,381.670	36,309.420
補－11	－122,680.000	36,595.000	－122,371.671	36,294.420

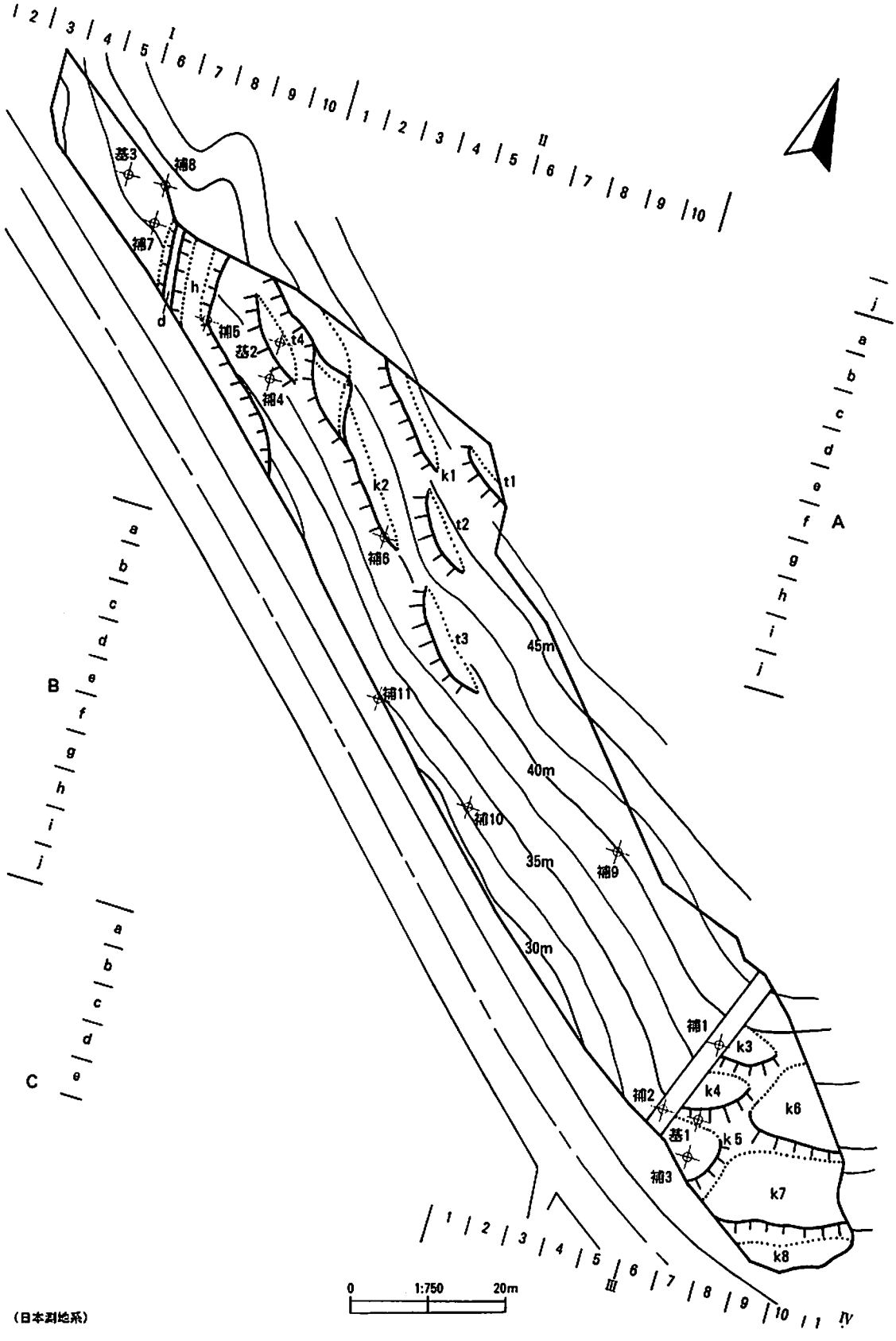


第6図　グリッド設定図

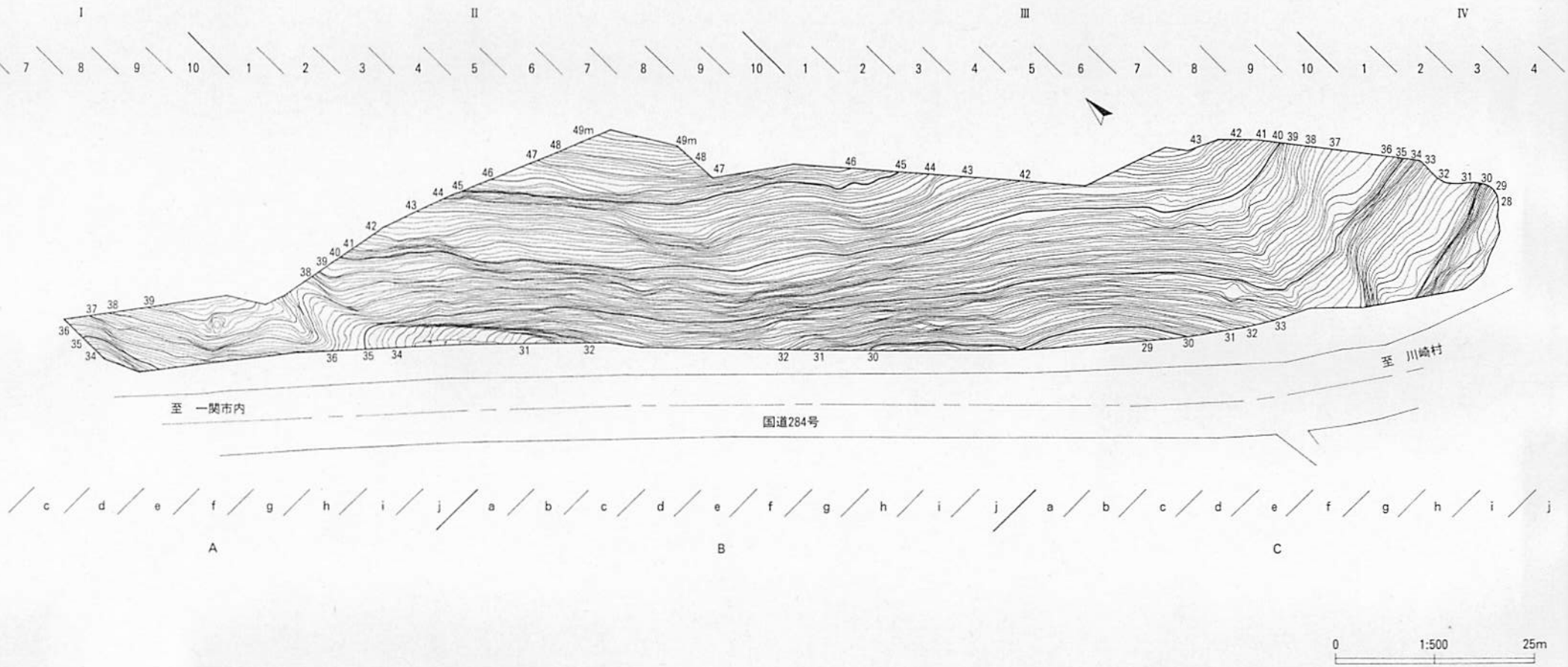
2．室内整理

遺構図面は必要に応じて第2原図を作成した。現況地形図はレベル及び光波を用いて縮尺1/100で作成したものを、1/500の縮尺で掲載した。曲輪、テラス状遺構、堀、土塁の第2原図は、地形図と光波で計測した平面図を照合させながら作成した。また、各遺構の面積が大きいため、平面図は縮尺1/200～1/400、断面図は1/80～1/200で掲載し、スケールを付している。

なお、平面図における方位は日本測地系を用い、原則として上を北にしている。


基3
補8
補7
h
d
補5
基2
t4
補4
k1
t1
k2
t2
補6
t3
45m
補11
40m
補10
35m
補9
30m
補1
k3
補2
k4
k6
基1
k5
補3
k7
k8
A
B
C
0
1:750
20m
(日本測地系)

第7図　遺構配置図



第8図　現況地形図

Ⅳ　検出された遺構

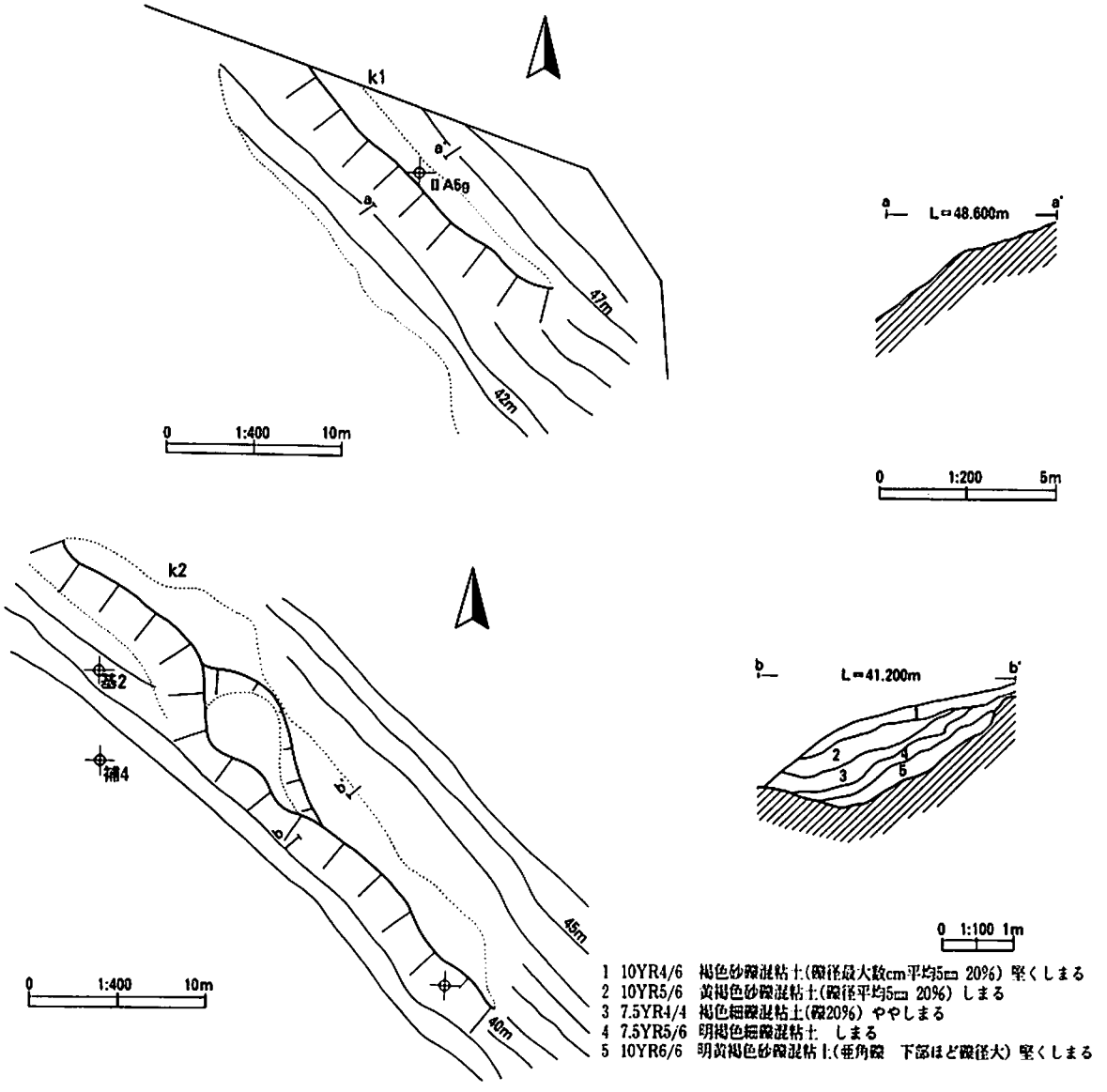
調査区は主郭から離れた区域にあり、遺構は曲輪を8カ所、テラス状遺構を4カ所、堀跡を1条、土塁を1基検出した（第7図）。いずれも城館の施設と考えられるが、時代を特定できるような遺物は発見できなかった。

1．曲輪

防備施設として山の斜面を人工的に削り平坦にした面を曲輪とする。本遺跡では調査区の北西側から2カ所、南東側から6カ所の曲輪を検出している。

1号曲輪（略号：k1）（第9図、写真図版5）

＜位置＞　ⅡA3e～ⅡA5g区にかけて北西-南東方向に延びる。標高は45.5～46.5mである。



第9図　1・2号曲輪

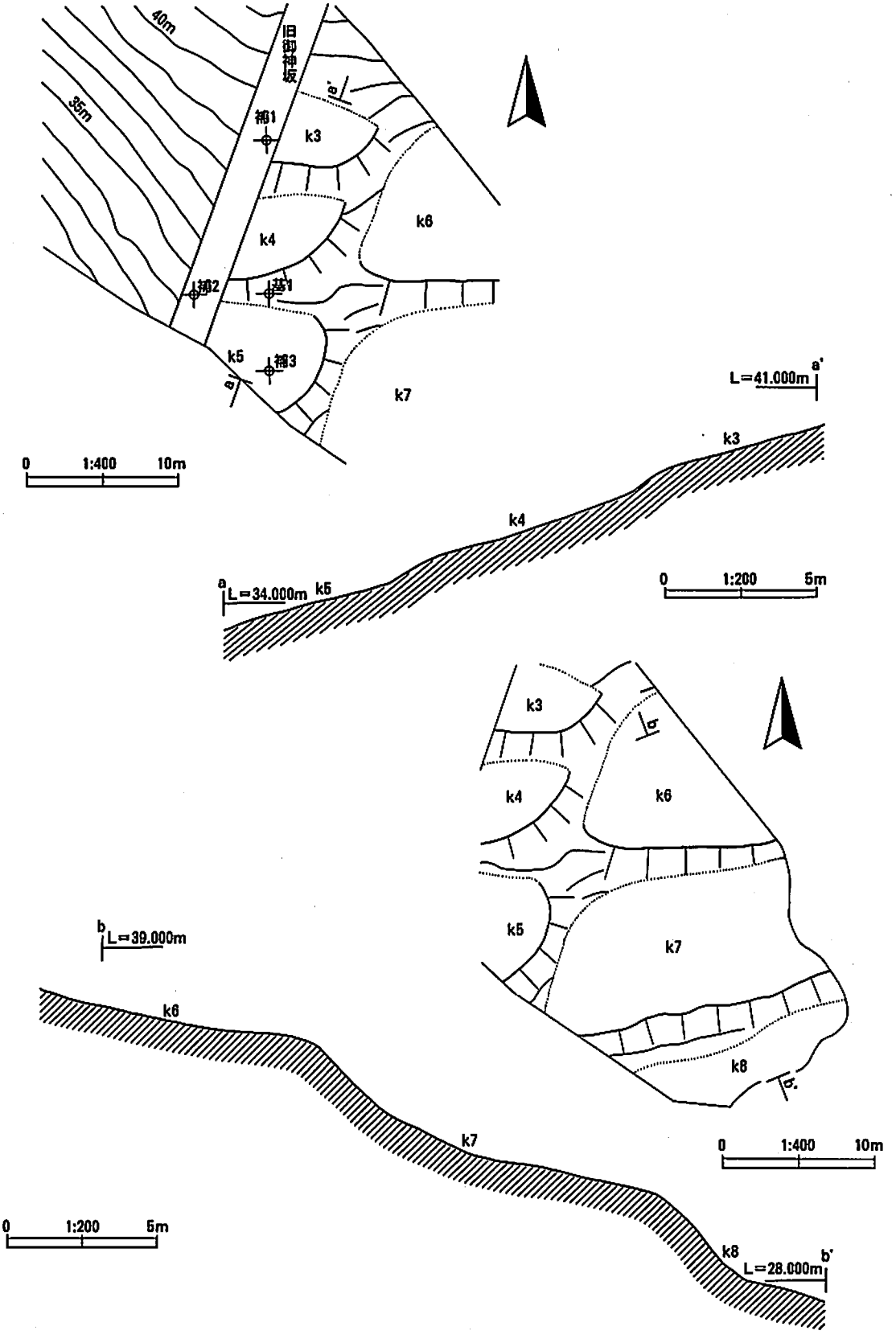
＜形態・規模＞　帯状を呈し、調査区外も含めた全長は約44mで北西－南東方向に延びる。調査区内では約20mが検出された。幅は約2.5mで、調査区外西側の堀に隣接する部分では長さ約５mにわたり南西方向に幅約６mでテラス状に膨らむ。本遺構面は約20度で南西方向に傾斜し、約40度で傾斜する山体斜面につながる。全面積は約121㎡で、調査区内面積は約50㎡である。
＜作事＞　柱穴等の施設は検出されなかった。
＜出土遺物＞　Ⅱ層上面で約５cmの扁平な川原石（亜円礫）が出土した。投石用に使われた可能性がある。

２号曲輪（略号：k2）（第９図、写真図版５）
＜位置＞　ⅠA10d～ⅡA5j区にかけて北西-南東方向に延びる。標高は39.5～43.0mである。
＜形態・規模＞　帯状を呈し、全長約40mで１号曲輪とほぼ平行に北西－南東方向に延びる。最大幅約４m、最小幅約1.5mである。中央部分が扇状地状に一段低くなっている。本遺構面は約15度で南西方向に傾斜し、約40度で傾斜する山体斜面につながる。全面積は約65㎡である。
＜作事＞　柱穴等の施設は検出されていない。
＜普請＞　盛土により構築されている。明らかに斜面下側に厚く盛られている状況が観察される。
＜埋土＞　5層に区分され、褐色の旧表土上に黄褐色粘土の盛土がなされている。
＜出土遺物＞　Ⅱ層上面で約10cmの扁平な川原石（亜円礫）が出土した。投石用に使われた可能性がある。

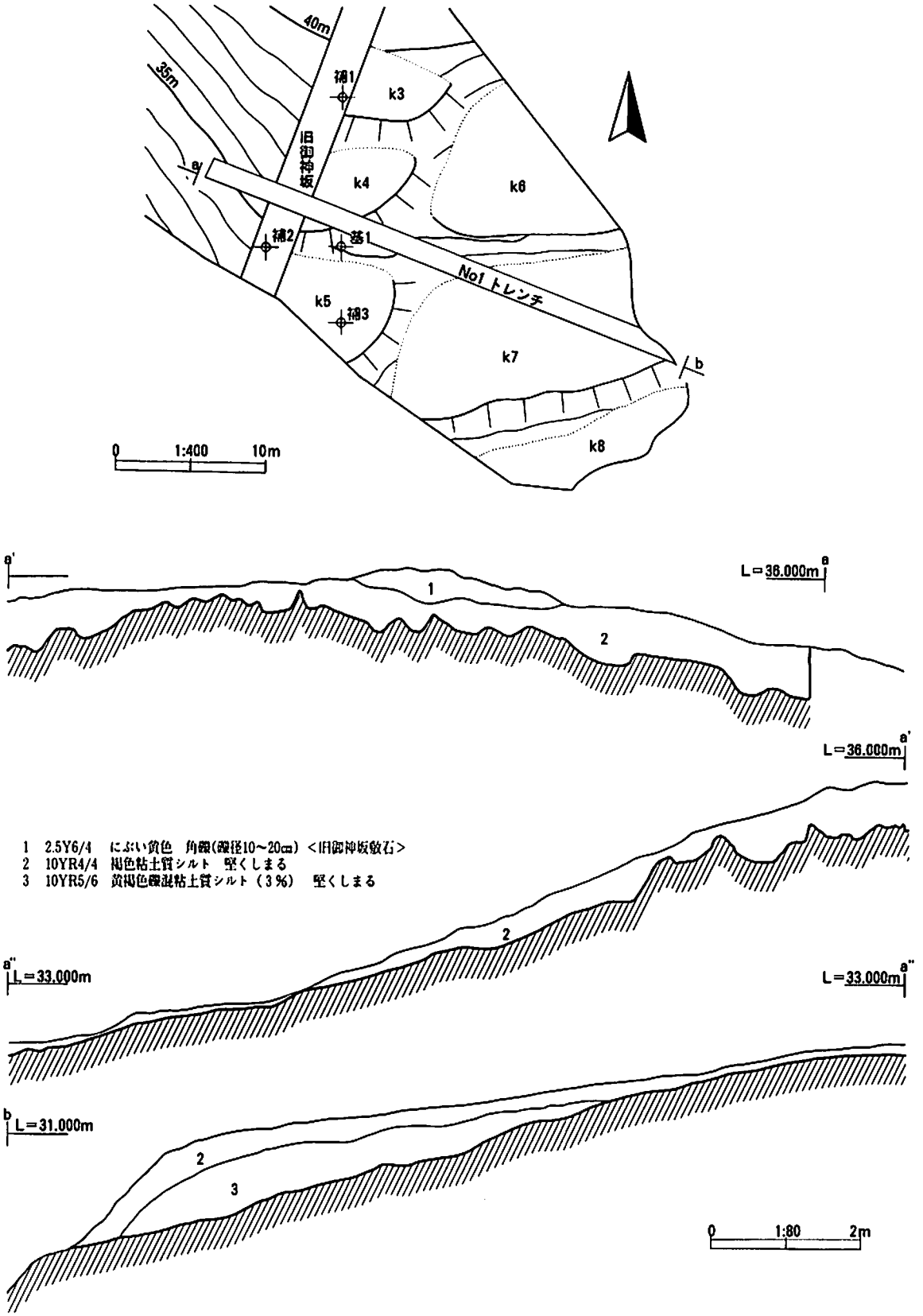
３号曲輪（略号：k3）（第10図、写真図版５）
＜位置＞　ⅢB7～8i･j区に位置する。標高は38.5～40.0mである。
＜形態・規模＞　台形状を呈する。３号～５号曲輪が南側に下るように階段状に配列し、その上段に位置する。東側の一段低い位置に比較的規模の大きい６号曲輪が隣接する。６号曲輪とは南北方向（斜面に対して直角）に走る岩盤層で接する。西側は旧参道（御神坂）が構築され不鮮明となる。斜面上側が幅広く長さ約5.5m、幅約4.5mである。本遺構面は約10度で南方向に傾斜し、約40度で傾斜する山体斜面につながる。面積は約25㎡である。
＜作事＞　柱穴等の施設は検出されていない。

４号曲輪（略号：k4）（第10・11図、写真図版５）
＜位置＞　ⅢB5～6j・ⅢC5～6a区に位置する。標高は35.5～38.0mである。
＜形態・規模＞　台形状を呈し、階段状に配列する３～５号曲輪の中段に位置する。３号曲輪と同様に東側は６号曲輪と岩盤層で、西側は旧参道と接している。斜面上側が幅広く長さ約6.0m、幅は約5.0mである。本遺構面は約20度で南方向に傾斜し、約40度で傾斜する山体斜面につながる。面積は約51㎡である。
＜作事＞　柱穴等の施設は検出されていない。

５号曲輪（略号：k5）（第10・11図、写真図版５）
＜位置＞　ⅢC5～6・b～c区に位置する。標高は33.0～35.0mである。
＜形態・規模＞　台形状を呈し、階段状に配列する３～５号曲輪の下段に位置する。東側は７号曲輪と岩盤層で、西側は旧参道と接している。斜面上側が幅広く長さ約7.5m、幅は約6.5mである。本遺構面は約20度で南側に傾斜し、約40度で傾斜する山体斜面につながる。面積は約52㎡である。


40m
35m
旧御神坂
a
a'
補1
補2
基1
補3
k3
k4
k5
k6
k7
0 1:400 10m
L=41.000m a'
k3
k4
a
L=34.000m k5
0 1:200 5m
k3
σ
k4
k6
k5
k7
k8
σ'
b
L=39.000m
k6
k7
0 1:400 10m
0 1:200 5m
k8
L=28.000m b'

第10図　3～8号曲線



第11図　4・7号曲輪断面

＜作事＞　柱穴等の施設は検出されていない。

6号曲輪（略号：k6）（第10図、写真図版5）
＜位置＞　ⅢB7～8j・ⅢC7～9a区に位置する。標高35.0～37.5mである。
＜形態・規模＞　長方形状を呈する。階段状に配列する6～8号曲輪の上段に位置する。東側は崩落や道路工事によりその一部が剥落している可能性があるが、調査区外に延びる。西側は3・4号曲輪をのせる岩盤と接する。調査区内の長さは約11.0m、幅は約10.0mである。本遺構面は約10度で南側に傾斜し、約40度で傾斜する山体斜面につながる。面積は約60㎡である。
＜作事＞　柱穴等の施設は検出されていない。

7号曲輪（略号：k7）（第10、11図、写真図版5）
＜位置＞　ⅢC7～9・b～c区に位置する。標高31.0～33.5mである。
＜形態・規模＞　長方形状を呈する。階段状に配列する6～8号曲輪の中段に位置する。東側は崩落や道路工事によりその一部が剥落している可能性はあるが、調査区外に延びる。西側は5号曲輪をのせる岩盤と接する。調査区内の長さは約16.5m、幅は約8.5mである。本遺構面は約13度で南方向に傾斜し、約40度で傾斜する山体斜面につながる。面積は約200㎡である。
＜埋土＞　表土下に黄褐色粘土の盛土が斜面下側ほど厚く堆積している。
＜作事＞　柱穴等の施設は検出されていない。

8号曲輪（略号：k8）（第10図、写真図版5）
＜位置＞　ⅢC8～10d区に位置する。標高27.5～28.5mである。
＜形態・規模＞　現状では長方形状を呈するが、国道284号の改良工事で南側の半分以上は破壊されているため、構築当初の形態は不明である。階段状に配列する6～8号曲輪の下段に位置する。調査区内の長さは約13.5m、幅は約3.0mである。本遺構面は約10度で南側に傾斜し、切り立った岩盤で国道に接する。面積は約40㎡である。
＜作事＞　柱穴等の施設は検出されていない。

2．テラス状遺構

曲輪より小規模で人工的な平坦面をテラス状遺構とする。調査区北西側で4カ所検出している。

1号テラス状遺構（略号：t1）（第12図、写真図版5）
＜位置＞　ⅡA6～7g区に位置する。標高は47.6～48.6mである。
＜形態・規模＞　紡錘形を呈する。調査区内の規模は長さが約7m、幅が約1.8mで、南西側の調査区外に若干延びる。本遺構面は約18度で南西側に傾斜する。

2号テラス状遺構（略号：t2）（第12図、写真図版5）
＜位置＞　ⅡA5～7・h～j区に位置する。標高は42.8～44.2mである。
＜形態・規模＞　不正な隅丸四角形状を呈する。規模は長さが約8.8m、幅は約2.8mである。本遺構面は約10度で南西側に傾斜する。

3号テラス状遺構（略号：t3）（第12図、写真図版6）

＜位置＞　ⅡB6～8・a～b区に位置する。標高は38.9～40.9mである。

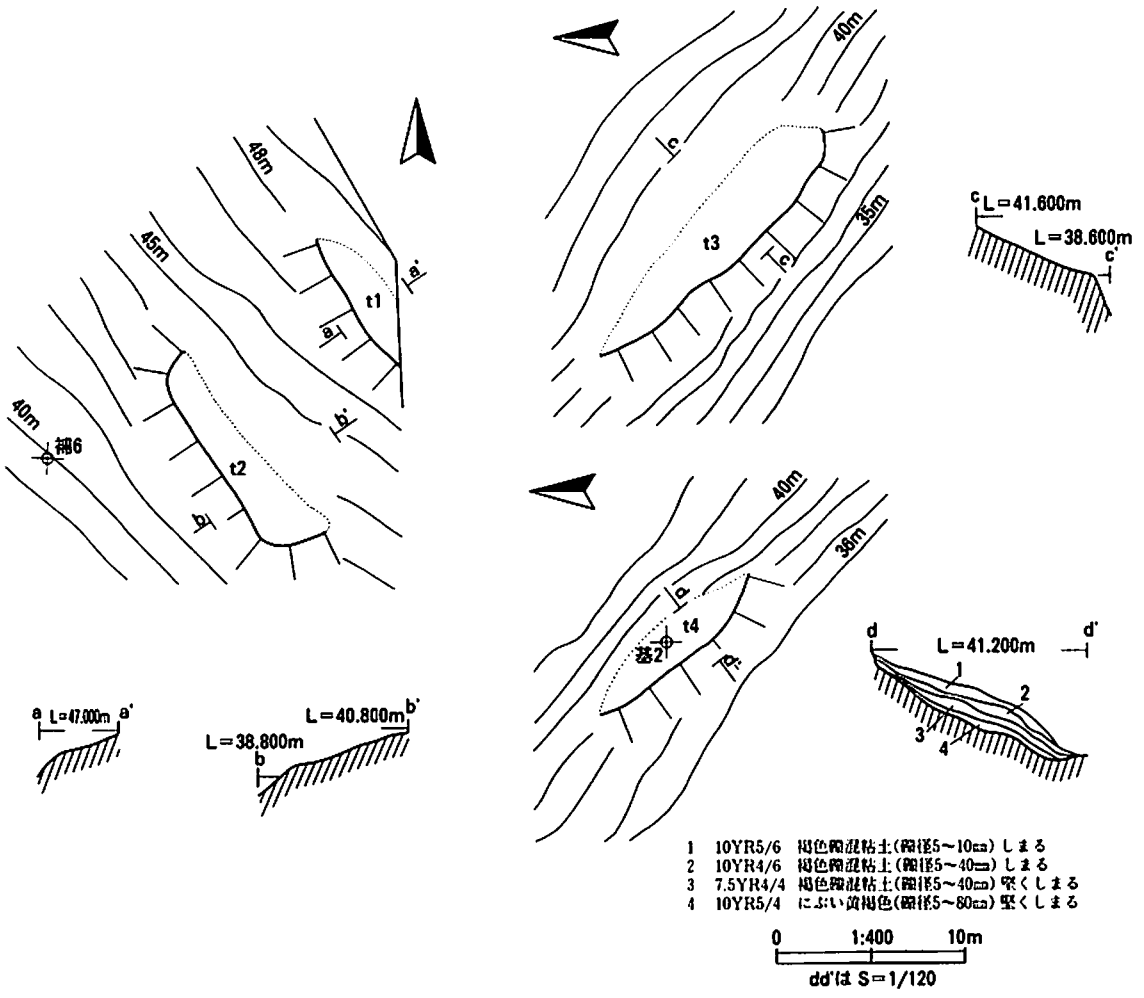
＜形態・規模＞　ペン先形状を呈する。規模は長さが約17mで、幅は約4mである。後背は馬蹄形の凹地を呈し、普請のための人工的な地形か自然現象かは判断できない。本遺構面は約14度で南西側に傾斜する。

4号テラス状遺構（略号：t4）（第12図、写真図版6）

＜位置＞　ⅠA10e～ⅡA1e～f区に位置する。標高は38.0～39.4mである。

＜形態・規模＞　紡錘形状を呈する。規模は長さが約11.8mで、幅は約2.2mである。本遺構面は約20度で南西側に傾斜する。

＜出土遺物＞　Ⅱ層上面で約15cmの扁平な川原石（亜円礫）が出土しており、投石用に使用された可能性がある。



第12図　テラス状遺構

3．堀跡・土塁

防備施設としてある程度の長さにわたって人工的に掘り下げた凹地を堀とし、土を盛ったり、地山を削りだして造った土手状の障壁を土塁とする。調査区の北西側でそれぞれ1条と1基隣接して検出している。

1号堀跡（略号：h）（第13図、写真図版6）

＜位置＞　調査区西側のⅠA7～10・d～iからⅡA1h～i区に位置し、標高は30.8～37.4mである。

＜形態・規模・方向＞　1号土塁に沿って検出され、1～2号曲輪と1～4号テラス状遺構を取り囲むように南北から北西－南東方向に向きを変えながら下っている。実行堀幅は約6.7m、実行法高は約2.8mである。断面形はU字形を呈する。

＜普請＞　地山は岩盤で、人工的な曲線を呈し、普請時に岩盤を砕いたと推測される。北西－南東方向に向きを変える部分は北側部分の壁のみが確認され、南北方向の部分に比べて粗雑で後世に構築されたものか、あるいは改変を受けている可能性がある。

＜埋土＞　腐葉土が堆積するだけで、埋土はほとんどない。曲輪の広がりを考えると本来の形からかなり変形している可能性がある。

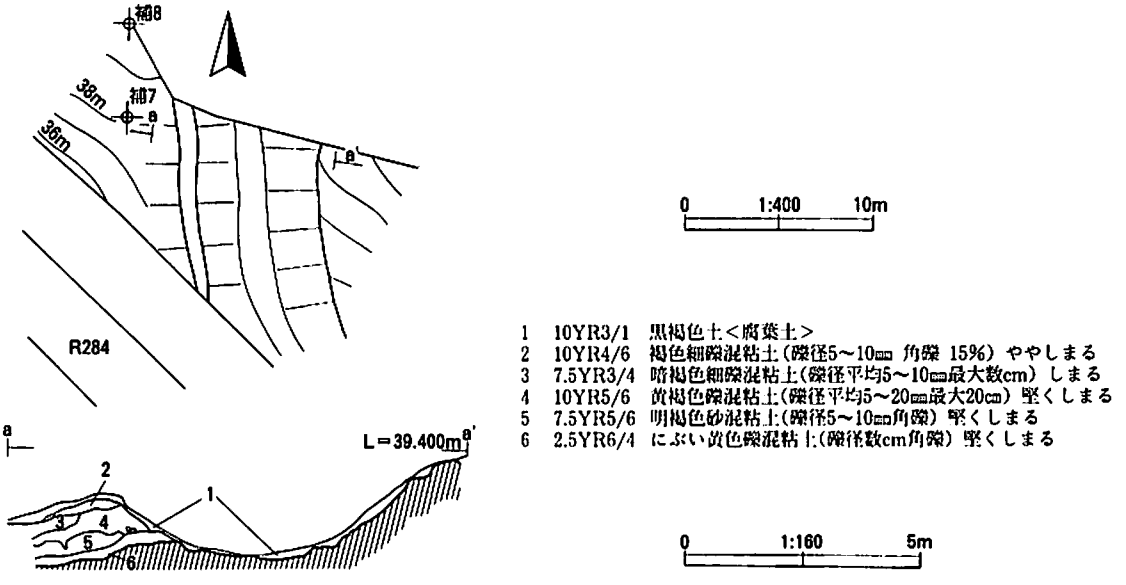
1号土塁（略号：d）（第13図、写真図版6）

＜位置＞　調査区西側のⅠA7d～e区に位置し、標高は36.0～38.6mである。

＜形態・規模・方向＞　検出された全長は約10mである。1号堀跡に沿って南北方向に延びる。斜面上側数mはやや不鮮明で、斜面下側は国道工事時に切り取られ、直立する岩盤で道路と接する。1号堀とともに北西側からの敵の侵入を防ぐために構築された防壁土塁である。基底幅約4m、上幅約1m、垂直壁高は約1.4mである。

＜普請＞　1号堀跡を掘った黄褐色土を旧表土に盛り上げた敲き土塁である。柵列等の作事は検出されなかった。

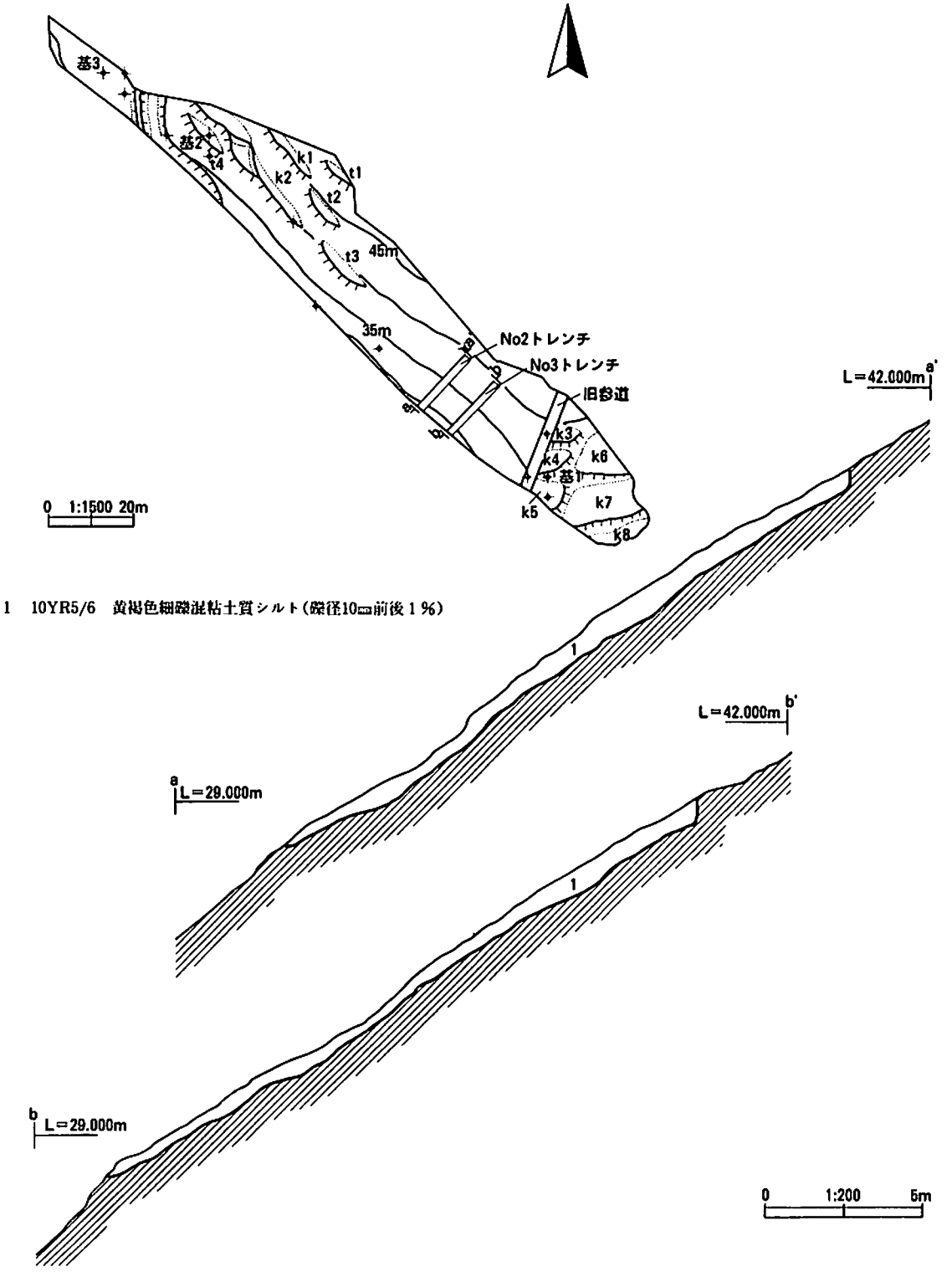
＜埋土＞　旧表土上に3層の盛土が行われている。黄褐色土が主体である。



第13図　堀跡・土塁

4．切岸状遺構

第14図に示すように旧参道と3号テラス状遺構の間の斜面中央部は、抉られた状態で急な勾配になっている。No2、No3トレンチの断面で判断すると普請を行った痕跡は見られず、自然による崩落部分と考えられるが、両側の曲輪やテラス状遺構の配置を考えると切岸として利用されていた可能性もある。



1　10YR5/6　黄褐色細礫混粘土質シルト（礫径10㎝前後1％）

第14図　切岸状遺構

Ⅴ　ま　と　め

本調査区域が館跡の南西端に位置するため城館に関連する遺構数が少ないことや出土した遺物がないことから、周辺の城館跡や城主について、また調査区周辺にある石塔（婆）についても若干言及し、まとめとする。

1．遺構について

（1）曲輪およびテラス状遺構

本館跡のつくりは丘陵頂部を中心に規模の大きい曲輪が主郭を取り囲むように分布し、この部分に構造物が建てられていたことは推測できた。しかしながら今回調査を行った部分は丘陵中腹付近に位置し、規模の小ささと主郭との位置的関係を考えると明らかに主郭部分を守るための前衛的な防備施設であることがわかった。調査区北西側から検出した曲輪及びテラス状遺構は斜面に対して重複を避けるように配置しており、幅は比較的狭い。一方南東側から検出した曲輪は階段状に連なっており、広めの構造となっている。北西側の遺構は投石などの攻撃の際に足場として利用していたと思われる。南東側の曲輪は何らかの施設が建っていた可能性が考えられるが、柱穴は確認できていない。

（2）堀跡・土塁

調査区北西側で検出した堀の深さは場所によって（調査区外）７ｍを超すところもあり、西側からの侵入に対して高い防御性を持たせた構造になっている。ただし、旧一関街道として利用されていたり、機械によって部分的に壊されたこともあったようで当時から現在のような規模であったかは疑わしい。堀跡に沿って構築された土塁は推定される山体の傾斜と土塁断面の様子から堀をつくる際に発生した排土を利用していると考えられる。

2．縄張りについて（第15図）

楊生新城館跡は、縄張り図および航空写真からもわかるように現熊野神社境内を主郭とする囲郭式の中世山城である。主郭の西側には井戸跡と見られる窪みがあり、南西隅には外枡形の虎口を伴っている。その主郭を中心として曲輪がほぼ東西に対照的に羽を広げたような形で段状に連なっている。城館の東方、北方には北上川があり、西側には堀を設置している。また、南西側（調査区域の北西）には攻撃の際の足場に利用したと思われる複数の曲輪やテラス状の平場があり、そこから南側の旧参道にかけては自然地形の切岸状態になっている。旧参道より東側には比較的面積の広い曲輪があり、駐屯所的役割をもった施設が建っていたのではと推察している。大手門は郷土史「弥栄の里」ではこの旧参道にあったとしているが、縄張り図作成の際の調査では北西側にあった可能性も考えられた。

東方・北方および西側は北上川・堀によって囲まれ防御性を重視した構造になっており、南西側は当時大崎領と接する地点でもあり、攻撃性を持たせた構造としたと考えられる。

3．周辺の城館と楊生新城の役割について

楊生新城と同時期（永正～天正年間）にあったと考えられる流郷の城館については、第３表及び第16図を参照頂きたい。中世の流郷にある城館は花泉の須崎城、金沢の大槻城を除きすべて山城である。場所は部落や耕地を一望できる小高い丘陵を背にした丘のような場所が多い。いざ戦争が起きたときの最後の防ぎ場所

として頂上に平坦な広さを確保しており、要害の地にはそれぞれの役目をもった出城をおいている。歴史的背景でも述べたが、峠城千葉氏が永正四年（1507年）に金沢の騒動により衰退すると、葛西氏の命で桃生郡の寺崎氏が峠城（苅明館）に転住している。寺崎氏は葛西氏の支流で葛西氏の信任が厚く、流郷の総領職的役割を持っていたようである。「花泉町史」の中で史家が峠城及び寺崎氏について次のように述べている。

「峠城（苅明城）は北上川狭窄部を城中から俯瞰する位置にある。流諸郷をも俯瞰できる枢要の地である。牡鹿・石巻方面より北上川河川の舟航を監視すると共に、流廿四郷を押さえ、三迫・栗原方面及び東山方面への交通を扼するため造船・舟の術にも詳しく、兵馬に長ずる寺崎氏が峠城主に起用された。」

楊生郷は北上川の監視と北西側からの侵略に対する防御を行うという、峠城寺崎氏の最も重要な役割を担った場所にある。峠城主寺崎常清が信頼する弟明清をその領治に当たらせたのもそのためであろう。

4．城主について

流郷の各城主は争乱ごとにかなりの変動があり不明な点が多く、楊生新城の城主についても諸説に違いがみられる。以下に主だったものを載せて推察してみる。

①熊野神社（楊生新城主郭跡）の参道入り口にある立て札より

> 熊野神社は正応五年（西紀1292年）八月当郷の城主、葛西家臣千葉山城守持高の祈願にて居城館山（旧館）に社殿を建立し、楊生村の鎮守として紀州牟婁より三熊野大権現の神霊を勧進し奉りしに創まり、其の後弐百六拾余年間、戦国の世の変遷を経て社殿も破壊せしかば持高の裔孫千葉山城守持家、弘治弐年（西紀1556年）九月、新館山（現在地）に社殿を造立し神霊を遷し再興し爾来今日まで凡そ四百参拾余年間、氏子一同（本郷、平沢、川崎一部）を以て社殿を修復し祭祀を行い御神徳を仰ぎ奉りて、家内安全、氏子繁栄、五穀豊穣、交通安全、国家安寧、世界平和を永大祈念し鎮守神として崇敬し奉るものなり

この札によると鎌倉末頃の楊生古城の城主は葛西家臣千葉山城守持高で、弘治二年に楊生新城（調査遺跡）に居館が移っていた時の城主は持高の裔孫の千葉山城守持家であったように窺える。「岩手県史」にある流郷の領主名の系図にはこの二人の名前は見あたらないが、鎌倉時代東北の所領を給与された武将たちは関東の本領にいて、その一族または家臣を代官させているので、千葉持高は代官として楊生古城に居し土豪となって持家の代までつづいていた可能性は考えられる。

②郷土誌「弥栄の里」～弥栄文化財史関係資料にある沼畑（楊生新城の所在する地区）の上館の記録より

> 文武常大宝年中阿部朝臣正仁居館後葛西之臣千葉上野守良胤之に居る天正十八年八月千葉山城守持家に至り落城す。

この記録には文武天皇時代にすで阿倍朝臣正仁によって居館が築かれており、鎌倉時代に葛西氏の家臣千葉上野守良胤之が城主となって、天正年間の千葉山城守持家の代に落城したとある。千葉上野守良胤之は源頼朝によって磐井・亘理郡等を与えられた千葉頼胤の長子良胤（＝則胤：東山長坂城主）のことであろうか。また、良胤之と①説にある千葉山城守持高に繋がりがあるかはこの記録からは分からないが、落城前の城主千葉山城守持家と①説から窺える弘治年間の城主名とは一致する。

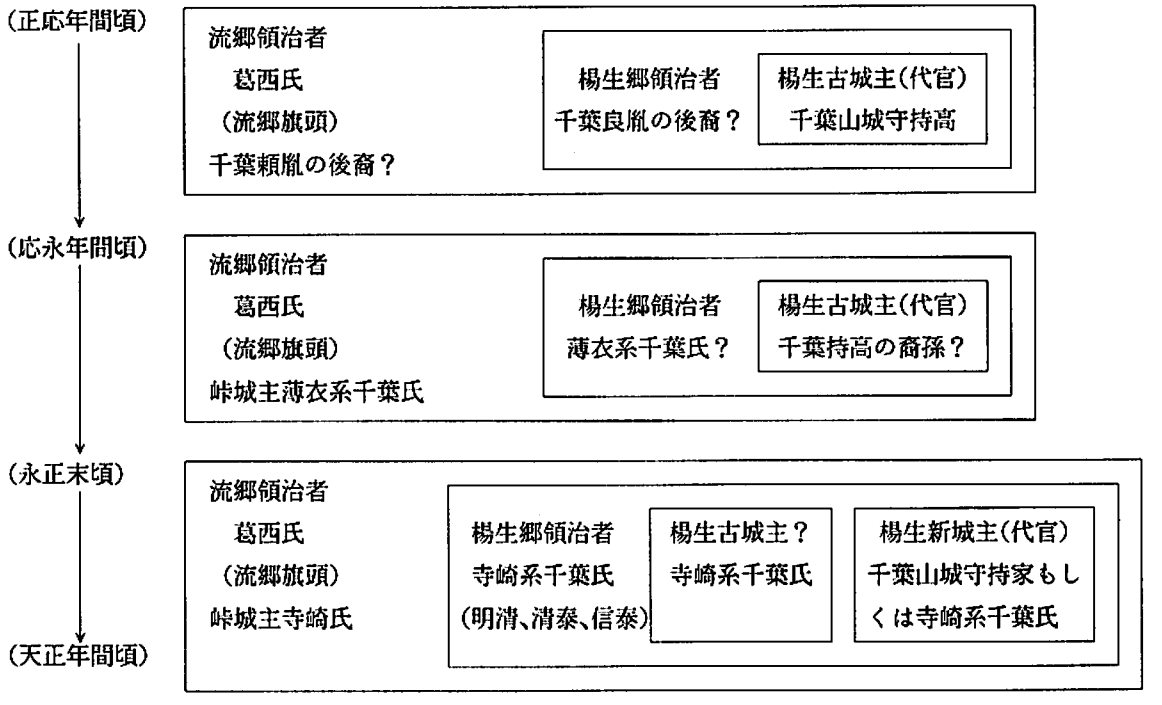
③岩手県史より

> 永正四年（西暦1507年）九月、以前の流郷峠城主千葉下野守時胤が金沢冬胤と合戦し敗退した折り、桃生郡より寺崎刑部大輔常清が峠城に転住し峠寺崎氏の祖となる。常清の舎弟明清が楊生郷を領治し、楊生城千葉氏の祖となる。

「岩手県史」によると流郷峠城主が千葉時胤から寺崎常清に替わった際に楊生郷の領治者もその弟の明清に替わっているようで、天正年間頃の城主は①②説にある鎌倉時代から続く千葉山城守持高の裔孫千葉山城守持家とは別の、峠城寺崎系の人物ということになる。

ただし、天正年間の頃まで楊生古城が存在しており、寺崎明清が楊生郷を領治する為の居館としたのは楊生新城ではなく楊生古城で、楊生新城を千葉持高の裔孫にあたる千葉持家に任せたと仮定すれば①②③説に矛盾は無くなる。また楊生新城が建てられた時期は、明清が流郷に移ってきた永正末頃ということにもなる。

<①②③説から推察する楊生郷の領治者及び楊生城主の変遷>



上記の変遷はあくまでも推察であるが、永正末頃に峠城主が薄衣系千葉氏から桃生郡より来住の寺崎氏に替わったことは史実のようで、以下に峠城主寺崎氏及び楊生城主寺崎氏系図について「岩手県史」に掲載しているものを載せておく。

(桃生寺崎～峠寺崎系図：安永九年大槻清賀書写「平性寺崎氏」より)

清重 － ？ － 清義 － 清治 － 清次 － 盛清 － 清氏 － 清基 － 清遠(連) － 常清 ┌ 明清

(初代) (二代) (三代) (四代) (五代) (六代) (七代) (八代) (九代) (十代)

(桃生城寺崎) ――――――――――――――――――――――――――――――――――→ (峠城寺崎)

(流楊生城主系図：大槻家譜より)

清遠(連) － 常清 (五郎右衛門？) ┌ 泰常 － 常範 － 茂治 － (大槻)

└ 明清 － 清泰(五郎左衛門) － 信泰 － 信覚 － 頼覚 － 頼有

(初代) (二代) (三代) (四代) (五郎右衛門)

├ 覚翁 ├ 致信

├ 重信 ├ 玄翁

└ 女 ├ 信定

└ 女

「岩手県史」には、楊生城主の二代目清泰（五郎左衛門）は葛西一揆の罪に問われ、天正十九年（奥州仕置

きの翌年）に宮城の深谷にて誅せられているとある。また、清泰の長男信泰は家督を継ぎ、次男泰常は金沢の地に分立したが父と同じく深谷で処罰されているとある。後の信泰の消息については不明のようだが、信泰の子信覚は深谷の難を逃れて仙北に走り剃髪して平泉にて坊中に逃れたとある。すなわち、寺崎系楊生城主千葉氏は二代目清泰もしくは三代目信泰で滅びたことになる。なお、信覚の子頼覚は毛越寺普賢院山繞坊を再興し中興の祖となっている。

5．石塔（婆）について

弥栄地区内には中・近世建立の石塔（婆）がいくつか見られる。そのうち調査区内の南東側にある江戸中期の石塔と、岩手県内でもあまり見られない中世期建立のものを紹介しておく。

※最後の梵字はナムアミダブツと読める

調査区の石塔

（調査区内の石塔） 高さ１ｍ、幅60㎝ぐらいのもので、天和三年（1683年）に建てられており、下に人名が刻まれている。神社・仏閣の参詣のための信仰的講を表した庚辰塔に類するものか、あるいは花泉史に「天和三年に流地域において河川増水被害」とあり、その時の被災者に対する供養塔とも考えられる。庚辰塔だとすれば岩手県内では８番目に古いものになるが、「庚辰」の文字はみられず、梵字の並びも県内にある他の庚辰塔のものとは異なっている。

中世石塔その一

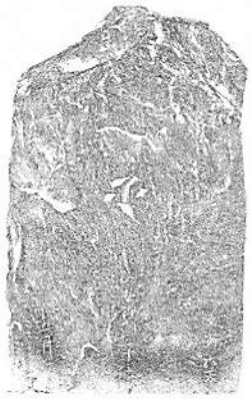
（中世石塔その一） 谷起の佐々木政吉氏の屋敷内にある高さ75㎝、幅60㎝ぐらいのもので、正応五年（1292年）八月六日に建てられている。弥栄地区にある石塔（婆）の中ではもっとも古い。正応五年の干支は壬辰であるが、なぜか庚辰と刻まれている。単なる間違いか、あるいは庚辰の日は三宝大吉日にあたり、八月六日の日の干支の可能性も考えられる。梵字は阿弥陀三尊（キリーク、サク、サ）を表しているが、（キリーク）の文字が半分以上摩耗している。御利益を願った人々が削って煎じて飲んだという説もある。司東真雄氏著の「岩手の石塔婆」によると通常はそれぞれの梵字の下、もしくは３つの梵字の下に蓮台が置かれているようだが、これには の下にしか置かれていない。（サク、サ）の梵字は後から付け加えたようにも見える。また、「おこり神」伝説といって、むかし「しらげの洪水」（白髪洪水：1247年に起きた大洪水）の時、どこからか流れてきたという言い伝えもあり、謎を多く含んだ石塔である。

中世石塔その二

（中世石塔その二） 平沢寺畑菅原喜治氏屋敷裏にある高さ75㎝、幅25㎝ぐらいのもので、応永五年（1398年）三月二十三日に建てられている。梵字は27年忌に用いる（バーンク）と考えられる。

（中世石塔その三） 滝口氏家庭先八重桜の根本にある、高さ75cm、幅40cmぐらいのもので、文安六年（1449年）に建てられている。郷土誌「弥栄の里」には三十三年忌供養のために建てられたとあるが、三十三年忌に用いる梵字は （タラク）で、この石碑の梵字は （イ：人福地蔵を意味する）と思われる。楊生古城の東側山裾に位置し、時期的にも重複すると考えられるので、あるいは楊生古城に拘わりのある石塔かもしれない。

「岩手の石塔婆」にある資料によると中世期の石塔（婆）は1081基あり、そのうち花泉町内にあるものが344基と最も多い。藤沢町が229基、平泉町が100基と続き、その次が紫波町の50基で、それ以外の地区は極端に少なくなる。また、ほとんどが北上川流域に分布している。（中世石塔その一）に「おこり神」伝説があったり、調査区内の石塔が流郷に大洪水があった時に建てられていたり、また分布が北上川流域に集中していることを考えると、石塔（婆）と洪水の間に、たとえば洪水を鎮めるために建立するとか、被災者を供養する等の何らかの関係があったのではないかと考えられる。



中世石塔その三

（参考・引用文献）

弥栄中学校（1973）：『郷土誌－弥栄の里－』　萬葉堂書店

司東真雄（1985）：『岩手の石塔婆－東北型の板碑文化－』　(株)モノグラム社

西ヶ谷恭弘（1994）：『戦国の城』　－上・下・総説編－　学習研究社

岩手県（1961）：『岩手県史』第二・三巻　中世編上・下　(株)杜陵印刷

花泉町史編纂委員会（1984）：『花泉町史』（通史）　花泉町史刊行会

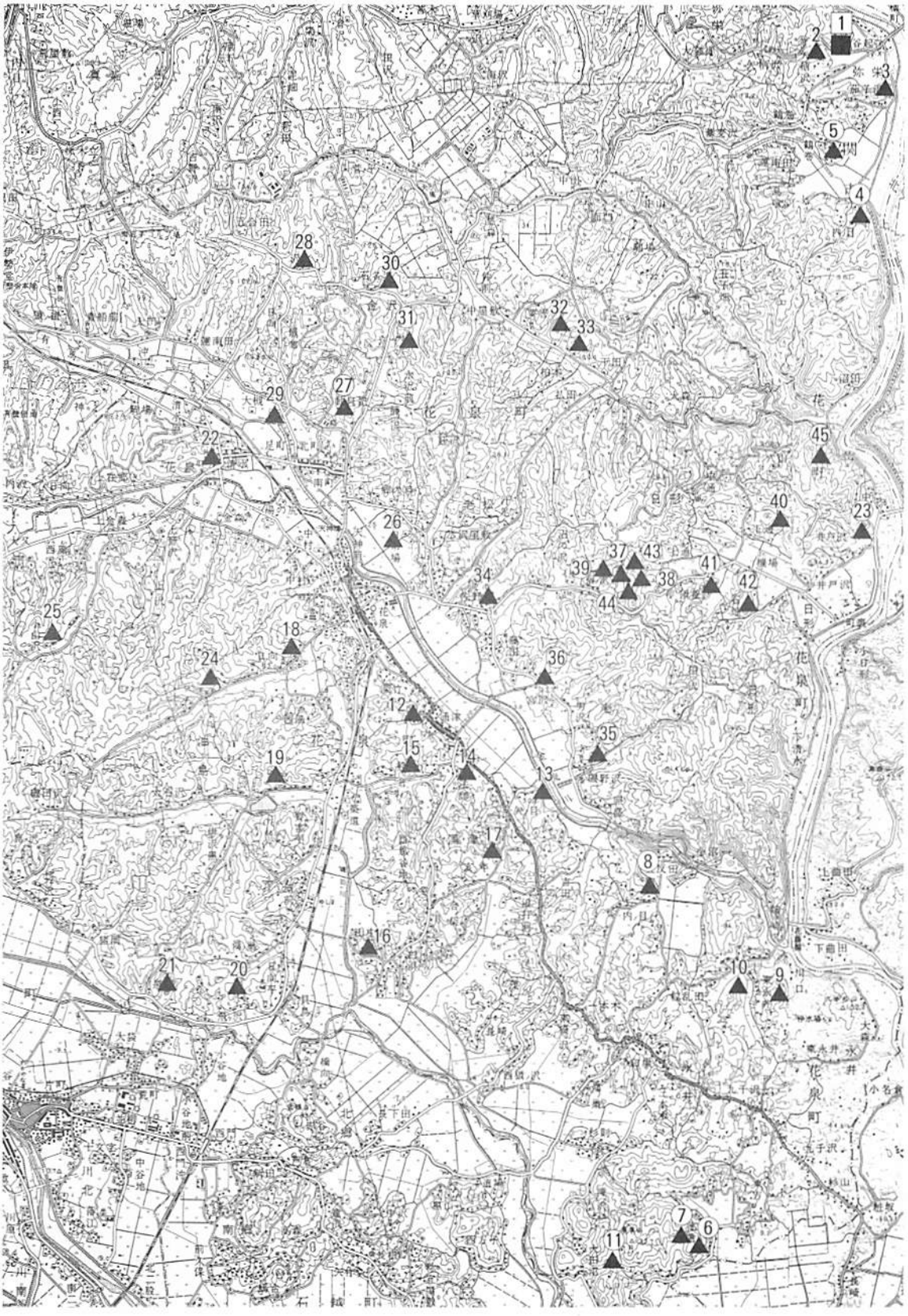
岩手県教育委員会（1986）：『岩手県中世城館跡分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第82集　岩手県教育委員会

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第353集（2000）：『篠館跡発掘調査報告書』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第371集（2001）：『川崎の柵疑定地発掘調査報告書』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

（室野 秀文氏作図）

第15図　細張り図



第16図　流郷城館分布図

第3表　流郷の城館跡一覧表

・城館表名　安永風土記書上による（○印の城館が楊生新城と同時期と思われるもの）

No.	城館名	地区	城主名	年代	形態	規模（東西×南北）間	別称
①	楊生新城	弥栄	千葉明清・千葉清秦	天文？・天正年間	環郭		宝館
2	楊生古城	弥栄	千葉持高	正応年間・天文？	環郭	二十×二十八	宝館
3	古館	弥栄	不明		連郭		
④	西風城	弥栄	岩淵民部？		直線連郭	四十四×八十	西の目館・奈良井城
⑤	富沢城	弥栄	岩淵民部・富沢彦次郎久胤			三十八×二十八	上の館・廻館
⑥	高倉城	永井	家臣加瀬谷三河	天正十九年	山城	二十二×二十四	西永井館・西永井城
⑦	釣野館	永井	菅原道慶・道明・道弘	天文十三年・天正十八年	山城		
⑧	西永井館	永井	菅原春道・道広・永井半左ェ門	長禄元年・天文十三年 弘治元年・天正十八年	山城	本丸三十×二十六 二の丸五十七×二十六	内ノ目館
9	青葉山城	永井	及川筑後・照井次郎・菅原道長 菅原春道・長井弥九郎・諏岐信行	保元中頃・文治中頃・応永二年 長禄元年・明応七年	山城	本丸二十九×十六 二の丸七十二×十	東館・東永井館
10	高崎館	永井	菅原文治郎	永享元年	平城	二十×十七	下館
⑪	晴之中山の楯	永井	菅原道正	天文二十一年			
⑫	紫館	涌津	岩淵正経・民部経定・瀬上宗時	徳治元年・康永元年・寛永中	山城	六十×五十四	涌津北館・神楯城
13	下館城	涌津	岩淵豊前・千葉五郎左衛門	延文五年	山城	縦二十五×横五十七	下紫館
14	湯山館	涌津	秋鼠駿河				悪法師館
15	熊倉館	涌津	岩淵伊勢径村（直径の子）	文明十四年	山城	縦三十六×横五十	池上楯
16	白濱館	涌津	岩淵藤三郎・藤五郎	長禄元年			涌津南城・南楯
17	猪閉館	涌津	千葉越中	延慶年間	山城	二十五×二十五	
18	上油田城	油島	金七郎（秀衡臣）	平安後期	山城	本丸二十四×二十 二の丸二十×二十八	竹の下館
19	浦沢館	油島	千葉右馬介定時・二階堂肥前	永享十年・不詳	山城	十三×十六	下油田城
20	西館	油島	佐々木安芸（実名　定信）		山城	十四×十五	蝦島館
21	猪岡館	油島	泉三郎忠衡	平安藤原時代末期	山の尖端・山城	十六×二十	泉沢館
22	二桜館	花泉	坂上田村麻呂・葛西式部 小輔清秀・伊達政景	延歴年中・延慶二年・慶長九年	山城	三十五×三十四	清水城・舞鶴城
㉓	高山館	花泉	清水重兼・金森内膳真利	永正十七年	山城	本丸三十×三十 二の丸四十×四十六	金森城
24	高森館	花泉	奈良坂主馬之介延平	建武年中	山城	本丸三十×三十 二の丸四十×四十六	奈良坂城・白鷹城
25	和泉館	花泉	奈良坂信定	文正元年	山城		小山城
26	須崎館	花泉	千葉相模	弘安九年	平城	二十四×二十三	中村城
㉗	朝日館	金沢	金沢九郎（秀衡郎従） 千葉由雲守清胤・伊豆信胤	平安・暦応三年・天正年間	山城	第一郭五十×二十 第二郭四十×三十	金沢城・東雲城
28	飯倉館	金沢	熊谷伯耆・千葉四郎兵ェ（泰常）	永享四年	山城		愛宕館
29	大槻館	金沢	大槻但馬守泰常（千葉四郎兵ェ）	天正年間	平城		
30	北館	金沢	熊谷丹波守胤直	永和二年	山城	二十×五十	
㉛	柴ノ沢館	金沢	佐々木四郎重綱	天正十一年	山城		
32	要害館	金沢	阿部讃岐	不詳	山城	百×四十	
33	柏木館	金沢	三浦大隈	不詳	山城	二十×五十	丸森館・大森館
34	杉屋敷館	老松	修験普賢院	不詳	山城	縦三十五×横二十六	
㉟	鷹島館	老松	及川重俊	天文十七年	山城	本丸四十×二十 二の丸三十五×八	男沢城
㊱	栄館	老松	長沢伊勢	天正年間	山城		宮沢館
㊲	苅明館本館	老松	千葉越中胤資・寺崎刑部大輔常清	永和元年・永正元年	山城	縦三十六×横二十四	峠城
㊳	苅明館東館	老松	岩淵美作	寺崎氏峠城在城期	山城	二十四×十	峠城東館
㊴	苅明館西館	老松	菅原惣左ェ門	寺崎氏峠城在城期	山城	十八×十	峠城西館
40	小館	日形	千葉左ェ門胤重		山城	縦十八×横十	
㊶	上須釜館	日形	寺崎専千代丸	天正元年～十九年		縦二十一×横二十	
㊷	葉山館	日形	小野寺肥後	天正元年～十九年	山城	縦二十五×横二十五	石畑館・小野寺館
㊸	苅明館北館	日形	千葉伊豆	天正元年～十九年	山城	縦六十×横十八	峠城北館
㊹	苅明館南館	日形	寺崎岩見臣千葉大隅	天正年間	山城	縦二十二×横十	峠城南館
㊺	瀬上館	日形	千葉大蔵重春	天正年間		縦八×横十三	

写 真 図 版

空中写真（南から）

空中写真（直上、写真下が南）

写真図版１　空中写真(1)

空中写真（南西から、平成15年４月撮影）

遺跡近景（南東から）

写真図版２　空中写真(2)・遺跡近景

調査前風景（東側、北から）

調査前風景（中央、東から）

調査前風景（西側、東から）

調査前風景（西側堀跡、南から）

基本土層（No 4 トレンチ、南から）

写真図版 3　調査前風景及び基本土層

No 1 トレンチ完掘状況（西側）

No 1 トレンチ完掘状況（東側）

No 2 トレンチ完掘状況（斜面上から）

No 2 トレンチ完掘状況（斜面下から）

No 3 トレンチ完掘状況（斜面上から）

No 3 トレンチ完掘状況（斜面下から）

作業風景（曲輪 2 、西から）

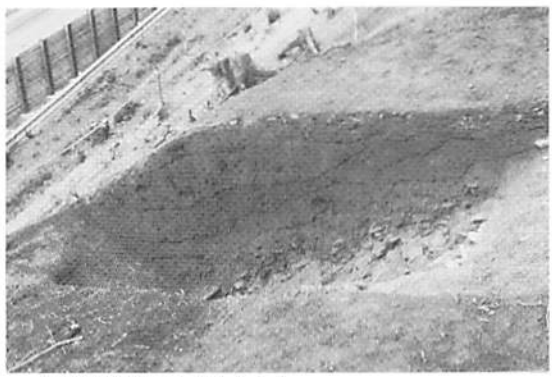
作業風景（曲輪 2 、東から）

写真図版 4　試掘箇所及び作業風景

1号曲輪完掘（東から）

2号曲輪完掘（東から）

2号曲輪完掘（西から）



2号曲輪断面（東から）

3～8号曲輪周辺（北から）

3～8号曲輪周辺（No.1トレンチ）断面（北西から）

1号テラス状遺構（西から）

2号テラス状遺構（西から）

写真図版5　1～8号曲輪、1・2号テラス状遺構

3号テラス状遺構（北から）

4号テラス状遺構（東から）

4号テラス状遺構断面（西から）

1号堀跡調査前（南から）

1号堀跡調査後（北から）

1号堀跡調査後（西から）

1号土塁調査前（南から）

1号土塁断面（東から）

写真図版6　3・4号テラス状遺構、堀、土塁

旧御神坂調査前（北から）

旧御神坂敷石検出状況（北から）

現参道入口

主郭跡（現・熊野神社）

調査区内　石塔

写真図版７　旧御神坂、現参道入口、主郭跡、石塔

報告書抄録

ふりがな	ようしんじょうたてあとはっくつちょうさほうこくしょ
書名	楊生新城館跡発掘調査報告書
副書名	一般国道284号道路改築事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第431集
編著者名	亀　大二郎・吉田　充
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11－185　TEL 019-638-9001　FAX 019-638-8563
発行年月日	西暦 2004 年 3 月 19 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
楊生新城館跡	岩手県一関市弥栄字沼畑地内	03209	OE09-2056	38度 53分 38秒	141度 15分 18秒	2002.10.18 ～ 2002.11.19 2003.04.08 ～ 2003.05.15	2,500㎡	一般国道284号道路改築事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
楊生新城館跡	城館跡	中世	曲輪　8ヵ所 テラス状遺構 4ヵ所 堀跡　1条 土塁　1基		

平成15年度　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所長	木村　昇	副所長	平野允苗
〔管理課〕			
課長	韮沢正吾	嘱託	高橋照雄
課長補佐	山岸直美	〃	湯沢邦子
主査	中嶋賢一	〃	沼田テル子
主事	猿橋幸子	〃	伊藤滋子
〔調査第一課〕			
課長	佐々木勝	文化財調査員	北村忠昭
課長補佐	佐々木清文	〃	八木勝枝
文化財専門員	金子昭彦	〃	丸山浩治
文化財調査員	吉田充	〃	北田勲
〃	亀大二郎	〃	島原弘征
〃	野中真盛	期限付調査員	坂部恵造
〃	新妻伸也	〃	小林弘卓
〃	阿部勝則	〃	藤原大輔
〃	杉沢昭太郎	〃	小針大志
〃	西澤正晴	〃	太田代一彦
〃	村木敬	〃	新井田えり子
〔調査第二課〕			
課長	三浦謙一	文化財調査員	星雅之
課長補佐	中川重紀	〃	佐藤淳一
〃	高橋義介	〃	星幸文
文化財専門員	小山内透	〃	溜浩二郎
〃	金子佐知子	〃	本多準一郎
〃	濱田宏	〃	丸山直美
文化財調査員	赤石登	〃	福島正和
〃	阿部眞澄	〃	米田寛
〃	水上明博	〃	須原拓
〃	阿部憲	〃	中村絵美
〃	早坂淳	〃	川又晋
〃	小松則也	〃	村田敦
〃	阿部徳幸	〃	(村上拓)
〃	窓岩伸吾	期限付調査員	吉田里和
〃	亀澤盛行	〃	江藤敦
〃	飯坂一重	〃	齋藤麻紀子
〃	鈴木裕明	〃	駒木野智寛
〃	林勲	〃	立花裕
〃	阿部孝明	〃	石崎高臣
〃	羽柴直人		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第431集

楊生新城館跡発掘調査報告書

一般国道284号道路改築事業関連遺跡発掘調査

印刷　平成16年3月12日
発行　平成16年3月19日

発行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11-185
TEL　(019)638-9001
FAX　(019)638-8563
印刷　(株)五六堂印刷
〒020-0021　盛岡市中央通3-16-15
TEL　(019)654-5610
FAX　(019)651 2167

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004